

尾瀬三ヶ峰高原の会 郷土学実践報告書



 **日本財団** 助成事業
The Nippon Foundation

民俗研究家の結城登美雄氏のメッセージ

地域とは、家族の集まりだ。よって、地域づくりは、自分の住んでいるところを良くするために、みんなでやる。みんなの力で課題（問題）や悩みを解決することだ。ハードルは低く。できる人からやる。できることからやる。今ここにあるものでやる。無理をしない。楽しみながらやる。

良い地域というのを7つあげるとすれば：

- 1．良い仕事の間がある、
- 2．良い居住環境がある、
- 3．良い文化の間がある、
- 4．良い学びの間がある、
- 5．良い仲間がいる、
- 6．良い自然、風土（水、風、光、土）がある、
- 7．良い行政がある、ことである。

~~~~~

## 地元学提唱者の吉本哲郎氏のメッセージ

土地の神の声を聞け！ 山に雲が湧き、やがて水が生まれ、森を育み、川となり海へと注ぐ。人々は、海、山、川の恵みを受け、太陽の道や水の道を選び、風の道を避けて、古くは飲み水を求めて山の麓に寄り添い、家の回りに、自給用の野菜を作る。柿、栗、梅、枇杷を植えて食べ、花も植えて楽しみながら先祖に供え、苦勞して川から水を引き、田を開き、森を大事に守り、木を植え、不時の出費や家建てに備え、山を仕立て、水を作り暮らしてきた。

自然を畏れつつ、その恵みに感謝し暮らしてきた。この地域固有の風土と共にある暮らしは、常に自然の持っている力を損なわずに、引き出し、うまく使いこなし、折り合いをつけてきた。それが先祖より時の検証を経た智慧を受け継ぎ、かつ工夫しながらの歴史だった。

これら（先祖から受け継ぎ、子供たちから預かっている）地域の暮らし。私たちは、そのわけを、読み解かなければなりません。地域がこれからも地域であり続けるために、地域と人の持っている力に気づき、先祖からの贈り物を子供たちに引き継ぐために。

なぜなら、「形」の持っているその意味をしっかりと捉えないでの、形だけの受け継ぎは、形骸化するのみならず、より大きな外の力に飲み込まれてしまうからだ。自ら調べる地元学（郷土学）とは、そういうことだ。

めざすのは、いい地域や町をつくること。いい自然、仕事、習慣、生活技術の学びの間があって、住んでいて気持ちがよく、友達が三人はいる地域のことだ。換言すれば、自然と生産と暮らしがつながり、常に新しい物を創り出す力を持っている地域ということだ。

## 尾瀬三ヶ峰高原の会の郷土学実践報告書 目次

|      |                                         |       |
|------|-----------------------------------------|-------|
| はじめに | 結城登美雄、吉本哲郎両氏のメッセージ                      | 1     |
| 目次   |                                         | 2,3   |
| (1)  | 尾瀬三ヶ峰高原の会が取り組んだ郷土学                      | 4     |
| (2)  | 日本財団との関係                                | 4     |
| (3)  | 尾瀬三ヶ峰高原の由来                              | 4     |
| (4)  | 尾瀬三ヶ峰高原の会の主な活動                          | 5     |
| (5)  | ホームページ                                  | 7     |
| (6)  | 各集落での探検隊                                | 7     |
|      | 、菅沼探検隊                                  | 7     |
| ア.   | 「あるもの探し」を实践                             | 7     |
| イ.   | スケジュール                                  | 8     |
| ウ.   | その結果                                    | 9     |
| エ.   | その反省点                                   | 10    |
| オ.   | 菅沼探検で発見したこと                             | 10    |
| カ.   | 菅沼の再確認と再発見                              | 10    |
| キ.   | 探検隊参加者感想カード                             | 13    |
| ク.   | 菅沼用語の整理                                 | 18    |
| ケ.   | 菅沼探検隊マップ 1,2                            | 19,20 |
|      | ・築地探検隊                                  | 21    |
| ア.   | 「あるもの探し」を实践                             | 21    |
| イ.   | スケジュール                                  | 21    |
| ウ.   | その結果                                    | 22    |
| エ.   | 築地の昭和 30 年頃と今                           | 23    |
| オ.   | <データ> 昭和 30 年ごろと平成 17 年の<br>農業・食生活・景観比較 | 24    |
| カ.   | 築地探検隊マップ 1,2                            | 25,26 |
|      | ・下平探検隊                                  | 27    |
| ア.   | 「あるもの探し」を实践                             | 27    |
| イ.   | スケジュール                                  | 27    |
| ウ.   | その結果                                    | 28    |
| エ.   | その反省点                                   | 28    |
| オ.   | 下平探検で発見したこと                             | 29    |
| カ.   | 下平の再確認と再発見                              | 29    |
| キ.   | 探検者参加者感想カード                             | 34    |

|                                              |       |
|----------------------------------------------|-------|
| ク. 今回の村めぐりで出会ったすばらしい言葉                       | 34    |
| ケ. 下平探検隊マップ                                  | 36    |
| . 御座入探検隊                                     | 37    |
| ア. 「あるもの探し」を实践                               | 37    |
| イ. スケジュール                                    | 37    |
| ウ. 探検隊手法で御座入の今昔を考えた                          | 37    |
| エ. 反省点と今後の課題                                 | 40    |
| オ. 御座入探検隊マップ                                 | 41    |
| . 須賀川探検隊                                     | 42    |
| ア. 「あるもの探し」を实践                               | 42    |
| イ. スケジュール                                    | 42    |
| ウ. 反省点                                       | 42    |
| エ. 発見したこと                                    | 42    |
| オ. 須賀川の伝統行事や祭り                               | 43    |
| カ. 子供の遊び                                     | 48    |
| キ. 須賀川の石仏                                    | 49    |
| ク. 須賀川探検隊マップ                                 | 50    |
| (7) 石仏や神社に関する学習会 (大久保勝実講師)                   | 51    |
| (8) 地元学がもたらしたもの                              | 52    |
| (9) まとめ担当者の感想と将来展望                           | 52    |
| (10) ワークショップの成果 1,2                          | 54,55 |
| (11) 尾瀬三ヶ峰高原の会郷土学についての感想<br>(ローカル・ジャンクション21) | 56    |
| (12) 会員名簿                                    | 64    |
| [編集後記]                                       | 64    |

### (1) 尾瀬三ヶ峰<sup>みつがみね</sup>高原の会が取り組んだ郷土学

尾瀬三ヶ峰高原の会は、日本財団から平成 17 年度の助成金を頂き、地元の現状と歴史と文化などを知るために郷土学を実践した。

本会は、尾瀬三ヶ峰高原（須賀川原、御座入原、菅沼原、築地原、下平原）と片品村第一行政区（以後、1 区）の活性化が目的で平成 16 年 9 月 2 日の設立総会と共に結成されたものである。会費制の任意団体であって、（年会費 2,000 円を支払う）個人会員は 30 名で、片品村農協と㈱サエラーリゾート尾瀬の 2 団体会員で構成されている。

本会は、活性化のためには地域を良く知ることが第一と考え、まず会員自身や家族・親族などが住む場所（1 区）とその歴史を知ろうということになった。

### (2) 日本財団との関係

本会は、片品村役場むらづくり観光課が当初、(財)日本財団との連絡をとり、星野賢二村長（当時）の推薦を受けて、同財団に助成金の申請をし、助成金を受けることとなった。

平成 17 年 4 月、助成金を獲得した団体の代表者を集めた日本財団主催の一泊二日の郷土学セミナーが東京の財団本部で行われ、尾瀬三ヶ峰高原の会からは会長と役場担当者（本会地区委員）が参加した。

そのセミナーに参加中、地元学を全国で推進している結城登美雄氏（宮城教育大学講師）と吉本哲郎氏（地元学ネットワーク主宰者、地元学協会事務局長、熊本県水俣市職員）にお目にかかり、地元学の ABC を聞くことができた。吉本さんは以前、片品村越本地区での地元学実習を指導した。

なお、本報告書では、日本財団助成金を受けての実践活動のため、以後、郷土学という表記に統一した。

### (3) 尾瀬三ヶ峰高原の由来

本会の前身は、上郷<sup>うわごう</sup>を考える会である。この会は、平成 16 年 1 月、地域の魅力を PR するためと地域振興のためにと、区長や村議会議員を含む有志らで結成され、この地域を突き抜ける街道名とその一体の高原名を村民に募集した。多数の応募を検討した結果、街道名を尾瀬グリーン街道、高原名を尾瀬三ヶ峰高原と定めた。同会は、両名が広く知られるようにと、片品村に協力を要請した。その結果、村は、大看板 2 基を設置した。

その後、平成 16 年 6,7,8,月と検討委員会を開催し、上郷を考える会が暫定的に結成した尾瀬三ヶ峰高原を考える会と共に発展的に解消されて、同年 9 月 2 日、尾瀬三ヶ峰高原の会が誕生した。

#### (4) 尾瀬グリーン街道は和合の場

尾瀬グリーン街道には、尾瀬三ヶ峰高原一帯と1区の和合の場所がある。昔からの開墾地だが、土地所有者は不思議と須賀川、御座入、築地、下平4地区からの住民だ。まさに須賀川原、御座入原、築地原、下平原という4つの原が和合して存在しているからである。

これは、かつて須賀川村、御座入村、築地村、下平村と呼ばれた頃から続くものだ。それぞれの村(今は1区の各集落)が独特な文化と歴史を醸し出していたにもかかわらず、土地の所有に関してこのように運命共同体とでも言うべき状態を見せてくれるのは、本会をしてその統合体という尾瀬三ヶ峰高原をアピールするにふさわしい証拠といえよう。

位置的には、隣接する菅沼原を北側に見て、尾瀬グリーン街道(=県道「鎌田立沢線」)を中心に、新宇毛内橋から、東側に御座入原と築地原、西側に須賀川原と下平原が調和よく並んでいる。

菅沼原を含めれば、5つの原が連結されて存在していることが分かる。

#### (5) 尾瀬三ヶ峰高原の会の主な活動

本会は、設立以来、「この高原地帯をどういう素晴らしい地域にすべきか?」など、話し合いを重ねて来た。その結果、生まれたのが、四つの研究グループ(景観改善グループ、1区の美しい風景発見整備グループ、ホームページグループ、観光農園・直売所等の研究グループ)だ。部会として、それぞれが現在活動中である。

本会としては、月例会をほぼ欠かさず行っている。

#### 2004年

06月26日(土) 19:30~誠道公民館、第一回上郷を考える会(仮称)会議

07月26日(月) 19:30~誠道公民館、第二回上郷を考える会 会議

08月07日(土) 19:30~誠道公民館、尾瀬三ヶ峰高原を考える会(仮称)  
役員会

08月19日(木) 19:30~誠道公民館、尾瀬三ヶ峰高原を考える会

09月02日(木) 19:30~誠道公民館、尾瀬三ヶ峰高原の会設立総会

09月28日(火) 19:30~林檎亭、役員会

10月25日(月) 19:00~誠道公民館、片品村景観条例勉強会

11月24日(水) 19:00~誠道公民館、11月例会

12月15日(水) 19:00~誠道公民館、12月定例会

#### 2005年

01月26日(水) 18:30~サエラリゾートホテル尾瀬、1月例会&新年会

- 02月13日(日) 19:00～林檎亭、役員会  
 02月24日(木) 19:00～誠道公民館、2月例会  
 03月23日(水) 19:00～誠道公民館、3月例会と  
     LJ21・朝田くに子氏の郷土学講義  
 03月26日(土) 08:00 スタート、サエラスキーセンター、三ヶ峰登山  
 05月06日(金) 19:30～林檎亭、役員会  
 05月21日(土) 13:00 林檎亭集合&スタート、「尾瀬グリーン街道を歩こう」  
 05月24日(火) 19:30～林檎亭、菅沼地区会議  
 06月04日(土) 13:00～菅沼集落センター他、菅沼探検隊実施  
 06月05日(日) 09:00～菅沼集落センター他、菅沼探検隊実施  
 06月15日(水) 19:30～誠道公民館、6月例会  
 06月27日(月) 19:30～菅沼集落センター、探検隊まとめ  
 07月01日(金) 19:30～林檎亭、役員会  
 07月25日(月) 19:30～遊楽木舎、7月例会  
 08月01日(月) 17:30～景観改善グループによる(尾瀬グリーン街道他の)  
     現地調査  
 08月06日(土) 19:00～林檎亭、ホームページ班会議  
 08月11日(木) 19:00～林檎亭、役員会  
 08月26日(金) 19:00～誠道公民館、8月例会  
 09月11日(日) 19:00～林檎亭、役員会  
 09月15日(木) 16:00 片品村文化センター出発、結城登美雄「食の地元学」  
     講演会(新潟県十日町中里支所)  
 09月16日(金) 19:00～林檎亭、役員会  
 09月20日(火) 19:00～誠道公民館、本会第二回総会  
 10月22日(土) 10:00～築地住民センター他、築地探検隊実施  
 10月23日(日) 0930～1500 下平集会所他、下平探検隊実施  
 10月27日(木) 19:00～誠道公民館、10月例会  
 11月24日(木) 19:00～誠道公民館、11月例会  
 11月26日(土) 13:00～1630 御座入集会場他、須賀川探検隊実施  
 11月27日(日) 09:00～1500、須賀川地区内、須賀川探検隊実施  
 12月08日(木) 19:00～林檎亭、役員会&地元学まとめ  
 12月11日(日) 13:00～林檎亭集合、尾瀬グリーン街道の景観整備作業、  
     夕方から忘年会(12月例会)

### 2006年

- 01月15日(日) 19:00～戸丸廣安方 菅沼地元学まとめ  
 01月22日(日) 14:00～16:00 誠道公民館、地元学勉強会、講師・

大久保勝実氏

18:00～誠道公民館、新年会「ミニミニ食の文化祭」(1月例会)

02月07日(火) 19:00～林檎亭、役員会

03月12日(日) 19:00～林檎亭、編集会議&役員会

03月26日(日) 08:00 スタート、第二回三ヶ峰登山

04月 「地元を歩こう」会(予定)

#### (6) ホームページ

本会は、ブログ形式によるホームページを2005年8月に開設した。会員間の情報交換のためだけでなく、広く多くの人に知って貰うためである。

ホームページ・アドレスは、以下の通り。

#### 尾瀬三ヶ峰高原の会のホームページ

<http://blog.livedoor.jp/ozemitungamine/>

#### (7) 各集落の探検隊で得たもの

1区は、現在大字である五集落から成り立っている。かつてはそれぞれが村であった。五集落の戸数は、須賀川が約120戸、御座入が約60戸、菅沼が32戸、築地が約35戸、下平が約50戸である。

この五集落のすべてで郷土学を実践した。

#### ・菅沼探検隊

1区における郷土学実践の最初となったのが、一番世帯の少ない菅沼集落で、名称は集落の名前をつけて菅沼探検隊と呼んだ。



#### ア. 菅沼探検隊が「あるもの探し」を実践

菅沼で平成17年6月4日と5日の二日間行なった。集合場所は、菅沼集落センターで、参加の延べ人数は約50人だった。

講師は、東京の「ローカル・ジャンクション21(以後、LJ21とする)」の朝田くに子代表と浦嶋裕子氏だった。

LJ21 連絡先[〒181-0012 三鷹市上連雀 4-1-6-301、電話 & ファックス : 0422-49-5428、URL://www28.cds.ne.jp/~localj、E-mail: [localj@cds.ne.jp](mailto:localj@cds.ne.jp)]

朝田さんたちは、片品村内における郷土学実践で、第3区と第5区で指導済みだった。彼女らは、班長の役目だけでなく、よその人の目で見、耳で聞く、<sup>かぜ</sup>風の人の役割を果たしてくれた。

#### イ. 菅沼探検隊のスケジュール



日程等は、以下の通り。

1. 日時 平成 17 年 6 月 4 日 (土) ~ 5 日 (日) の 2 日間
2. 場所 菅沼地区内
3. 内容 古道や自然神・石仏などを調べる  
菅沼の暮らしを調べる  
の 2 つのテーマに参加者が分かれ、菅沼を調べる。
4. 調べ方  
郷土学という方法で調べる。自分たちが暮らす菅沼のことをもっと知ろうと、みんなで歩いた。よその人の視点を取り入れることで、当たり前過ぎてふだん気づかなかったことに気づくこと、また新しい発見、があるかもしれないと、風の人が加わった。そこで見つけたことを地域住民や参加者で話し合い、地域づくりのこれからを自分たちで考えるきっかけにしたいと考えた。
5. その他  
菅沼の住民にはできるだけ大人数の参加を呼びかけ、親戚の方や知人を誘っていただくよう要請した。よそに住む人々の参加も促し、小・中・高生も大歓迎とした。
6. 持ち物  
ノート・鉛筆、カメラ(持っている方)、お茶・ジュース・お

やつなどは、各自が用意した。

#### 7. 日程

4日(土) 13:00、菅沼集落センターに集合。自己紹介、スケジュールなどを説明。

14:00、調査に出発。午後5時頃まで調査。一時解散。

19:00、同センターに集合。(調べたことの記録、発表、参加者間の交流)

5日(日) 08:30、同センターに集合。スケジュールなどの説明。

09:00、調査に出発。お昼頃まで調査。

13:00、同センターに集合。調べたことの記録やまとめ・発表などをする。

17:00、解散。

#### ウ. その結果

4日、菅沼探検隊は、あいにくの雨にもかかわらず、二つのグループに分かれて外出し、調査を行った。

朝田グループは、菅沼集落センターから南方に杜(鎮守の杜)を含めて調査に出発し、浦嶋グループは同センターから北方に歩を進め、小高い山にも道なき道を待ち受ける草木を掻き分けながら探訪した。

朝田グループは、集落内にて物知りの年配者のお宅を訪問し、聞き取り調査を行った。

その夜、参加者は、再び同センターに集合し、その探検結果をもとにして話し合い、そして図案化し、また要点をポストウィットでもってその用紙に添付した。朝田さんらの協力を得たため、用意した大型の用紙は見る見るうちに要点が書き込まれ、踏破してきたそれぞれのポイントが次々に紙面に表現された。

翌日(5日)のプログラムでは、参加者が再び朝田グループと浦嶋グループとになって、菅沼集落の東2キロメートルにある東田代村跡地をはじめ、別々の行程を辿り、午後の集合時間には双方新たな“収穫”を持ち帰った。

#### エ. その反省点

本会では、二日間の菅沼探検を、参加者のケガや病気もなく、無事に挙行できた。会員間の共通認識は、それなりの収穫を得たというものだった。

敢えて、反省点を列挙すれば、こうだ。

- 日程が二日間とはいえ、時間が足りなかった感が否めない。
- 聞き取り調査にあたっては、記録を十分とらなかったことが後悔される。
- プログラム進行など終始、朝田さんたちに任せきりであって、自分たちの積極性や消化能力が不十分だった。
- 年配者を始めとして、集落の大半の人を巻き込みたかったが、そこまで達成することができなかった。
- 編集やまとめの能力がいまひとつのため、探検隊マップや報告書の作成に苦慮した。

#### オ. 菅沼探検で発見したこと

郷土学を実戦する上で、菅沼で経験したものは、ざっと言ってこうだった。

- ふだん見ていた筈なのに、実はよく見ていなかったか、自覚していなかったものが意外に多かった。昔とても神聖視し、重要視していたことを、今ではすっかり忘れ、目もくれなくなっていることを、この探検を通じ、あらためて感じた。
- 自分の“知っているつもり”という殻が壊されて、「なるほどね」という思いになった。そのキッカケを作ってくれたのが風の人である。
- 自分が生まれ育ったところをあらためて知ることとなった。世代を超えて伝承して行かなければならないことの大切さとその内容の多さを知った。

#### カ. 菅沼の再確認と再発見

##### ● 菅沼の文化・歴史

菅沼集落は、その規模に似合わず、豊富な文化や風習そして歴史がそこにはあった。

菅沼は、太閤検地（1582-98年）の時に「菅沼村 四十三石 五斗九合」と記録があるように、きわめて“古い村”だった。

##### ● コミュニティ規模

現在の世帯数は32戸だが、それは江戸時代からほとんど変わっていない。「村の戸数はこれ以上増やしてはいけない」との言い伝えから、増えたときは家族を村外に養子や嫁に惜しみなくかつ積極的に出し、あるいは嫁がせてきた。東田代村の開墾と開村のため、そして須賀川村の開村のため、村人の一部（しかも優秀な人材）を躊躇せず“提供”している。

他の村では、生まれてきた幼児を食べ物が不足して育てられないと判断

し、間引きの手段として川に流すことすらあった時代にも、菅沼では必要以上に家と住民を増やさない工夫をしてきたことで、艱難辛苦の時でもそれを乗り越えることができたという。

### ● 絆の社<sup>もり</sup>

社は菅沼の親戚関係を示すもの。社（正式には、日光大権現様、諏訪大明神様その他が祭られている鎮守の社）には、今でも大晦日や正月三が日にお参りに行くが、そこは須賀川集落の鎮守の社でもある。ここは、菅沼と須賀川が昔から親戚関係にあることの“証拠”である。

社の入り口にある石造りの鳥居が築地集落から菅沼に贈られたものだと  
の言い伝えが一部にだが根強くある。

かつて流行の病気が築地を席卷し、村人を痛く苦しめた時、「これは可哀そうなことだ」と、最大限の物心共の協力を行った隣の村・菅沼に対して、当時村人にとって命の次に大切であった社の鳥居を差し出したものだという説だ。村の崩壊を食い止めるための大助けをしてくれた菅沼へのお礼の印というわけだ。

この“隣村の契り”説を「まさか」と異論をはさむ人も居るが、今となつては確固たる証拠が出てこないかぎり、肯定も否定も仕切れない。ただ人間愛として、心を捕らえるに足る不思議な言い伝えであると言えよう。

### ● 学びの場

菅沼は学問に熱心な集落だった。菅沼の墓地群には、<sup>せきりゅうわさん</sup>関流和算の指導者の墓があった。算翁道学居士と名づけられた星野吉兵衛のもので、墓石には1870年（文化7年）と記してある。村人だけでなく、よその地域の人々にも和算や珠算や読み書きを教えたようだ。

また“学問の神様”の<sup>てんじんぐう</sup>天神宮があった。私たちが訪れたときは、その天神様が木や草の藪に埋もれて久しかった。そこは郷土学演習でもって“日のあたる”ものとなった。奇しくも、菅沼探検隊の中には、天神宮を代々守る家の継承者がおり、本人もいろいろ聞かされ大変驚いていた。

かつて菅沼（村）の子供たちは、書道を習ったとき、よくその天神様のところに駆け上って行き、書き上げたものを天神様に見せ、家に帰って親や親戚から「よく書けた」と褒美をもらうのが慣わしだったそうだ。

天神宮は、菅沼の上手の北側にある小高い山の<sup>うしくびとうげ</sup>牛首峠を登ったその山中腹の右側にある。今では子供も大人も行かない、忘れ去られてしまっていたが、その石堂は刻印が読み取りづらいこともなく、威風堂々と菅沼集

落を見下ろしていた。前出の後見人の家では、これを機に再び団子か何か供えたいと言っている。

- 蚕かいこの村

菅沼は養蚕が盛んであった。その証拠が天神様の北東に祭られたほくしんみょうけん こかげれいふさま北辰妙見・蚕影靈符様だ。菅沼居住地の北方山沿いの頂上近くに位置している。今でも、昔の慣わしを意識して供え物をしている。

- 菅沼の幾何学

菅沼は、その配置に幾何学的な特徴がある。居住地域に関しては、北側を東西に走るひなたみち日向道と、南側を東西に走る“おろみち日陰道”ともいえる道がある。二本の小川に沿ってその二つの道は作られている。

その日向道と日陰道に伴って四つの組ができています。日のあたり易いひなたぐみ日向組と日のあたりにくいおろぐみ日陰組に、そして東側“かみぐみ上手”を上組と西方“しもぐみ下手”を下組と分けた。それは、菅沼を構成する今のりんぼはん隣保班4つの原型だ。

- 合途原

ごうとつばら合途原と呼ぶ。旧日光街道と旧会津街道の合流（分岐）する場所が菅沼の西原にあり、そこを指した地名だ。その場所に行くと、行き交った無数の人々の足跡が僅かながらイメージできる。



- 道祖神

合途原には、単体道祖神がある。1730年に建立されたとその石塔に記入されている。道祖神でも、単体のものは極めて珍しく貴重なものだそうだ。

- 東田代村跡地

明治初めに廃村となった東田代村。その跡地が菅沼の2キロメートル東側、標高1000メートルの高地にある。約280年間存在したといわれる（墓石の多い）不思議な村跡だった。

## キ. 探検隊参加者感想カード

その要旨は、以下の通り。

### 1. 西原

- ・ 西原の（石仏、ラベンダー、トマト、リンゴ）周遊コースの整備をしたらどうか。
- ・ 菅沼の西原の景観。新しい景観としてどう作っていくかである。
- ・ 畑の周囲に桑の木が植えられ、風景がずいぶん違った。
- ・ 小立沢からの水をひいてきて西原に池・水の流れを作る。
- ・ 家が西原の畑の中にできてきた。昔は山を背に作られていた。
- ・ 西原はよく耕されていて、よい風景だと思う。いつまでも畑がしっかり耕される状態が保持できればよい。
- ・ 単体道祖神と双体道祖神の所在と相互依存関係に心がひかれた。両道祖神の位置とりに、合途原とそこから会津街道と日光街道の歴史的重みを感じとれた。双対道祖神は、大竹文夫宅の裏（日光の杜の端）にも存在する。
- ・ ラベンダー畑の上、送電線下に道ができて、かつて一度歩いたことがあるが2~3ヶ月に一度くらい連れだって歩いてみたい。

### 2. 菅沼全体

- ・ 菅沼は、静かでおだやか、そしてまとまりのある“むら”。堅実で、名人が多く、博打はしない。菅沼の人は働き者、特に女性はよく働く（カカア天下？）。菅沼は畑多く水が少ない。対比だが、東小川は水が多く、畑が少ない、しかも博打好き。
- ・ 精米所ができるまで、精米は苦勞した。それまでは水車で、米は7分づき。女性の仕事であって、大変だった。
- ・ 日向道を歩いた風の方は、まるで石仏ギャラリーのような感じかしたと言っていた。地元の方は何も気にとめなかったが百番頭ひゃくばんとうなどの石仏が何か意味を持っているように思えてきた。そういえば、草刈りなどをしてよく見えるようにし、説明版などを整備すると「哲学の小道」などと名乗ってもいいかも？ 神社の鳥居の伝説も築地の人の合意が得られれば、物語として使ってもよいのでは？
- ・ 集落排水処理場から下の砂防ダムの河原へ下りていく道があるが、沢ガニがとれ、流木もあり、夏の子供の遊び場として整備してもいいのではないか。
- ・ 現在、民宿が2軒、昔は養蚕をやめても農業だけで食べていけた。
- ・ 須賀川地区との結びつきが強いのにに対して、築地や下平や御座入との結びつ

きが小さい気がした。分村や橋、山や谷、道といった関係性について知りたい。

- 水の確保がとても困難であったこと。そのため部落に住める人数が決まっていた。水が生きるために必要かつ重要であったこと。これ以上住めないと判断した時は、余分な人は他の地域へ出された（＝出て行った）そうだ。
- 地形としての川岸段丘を（ほんの一部だが）断面から見ることができ、何千年かの昔の片品川の流れを想像できた。「道路標識かな？」と思われる石塔の多さと種類に驚いた。

### 3. 鎮守の杜

- 神社の鳥居がどういう経過で築地から来たのか。
- 杜の鳥居のことだが、昔(江戸時代)、築地の住民が赤痢で困ったときに菅沼住民が思い切り助けたので、そのお礼に鳥居を菅沼に差し出したという説がある。
- 昔の須賀川と菅沼の関係だが、1701年に遡る物語の系譜である。
- 杜の灯籠には、面白い三つの穴（ハート型、丸形、月の形）がある。耳を当てると風の音が聞こえる。心の澄んでいない人には音が聞こえない？昔の子供達は灯籠に石を投げて遊んだ？
- 社の上の宮には、お宮の紋があり、それは九曜星と七曜星の二つだった。



- 杜に行く道は、かつて狭く行き交うのが大変だったが、ここに来てその道がすごく良くなった。

### 4. 他のお参り場所

- [霊符様] <sup>れいふ</sup> 北辰妙見様と蚕影様を合祀したところを霊符様と総称して呼んでいたようだ。昔、養蚕が盛んであったころは、よくお参りしたそうだが、今では養蚕をしている所もなく、どのように扱っていくのがよいか考えてみたい。

- ・ [天神様] <sup>しみずぐち</sup> 清水口から牛首峠を登り、その中腹を右手に進んだところに天神様があり、星野学さんの家が管理者であったようだ。星野キヨさんの話では、「頭が良くなりますように！」「勉強ができるようになりますように！」と祈願するために子供たちがよくお参りに行ったそうだ。今でもそうする人がいるのだろうか。
- ・ [薬師様] テニスコート造成のとき、現在の位置（民宿「山荘薬師」の隣）に移転。なぜ2体あるのか、いつ頃作られたのか不明。昔は遠くからもお参りに来たそうだ。
- ・ [<sup>あきばじんじゃ</sup> 稷葉神社] 昔の社は火事で燃えたこともある。向かって左に十二様、真ん中が稷葉様（あきやさまと呼びがち）、旧石塔は右側にある。右に登りの階段が急で、酔った人なら落ちてケガをしそうな急勾配だ。公会堂（現在の菅沼集落センター）ができるまで（昭和20年代前半）、境内を集会場に使っていた。
- ・ [お役目] 稷葉神社をお守りするのは大竹氏、諏訪神社は星野氏。ならば戸丸氏は？
- ・ 自然を相手にする仕事（農業や林業など）が多かったため、自然神を祭るようになったのだろうか？今現在では忘れてしまったものも多く、時代の変化とともに記憶からも消えていくのが悲しい。
- ・ これ以上調べても何もわからないかもしれないし、知ったところでそれで終わるというくらいの自己満足となるかもしれない。でも、その中に先人たちが培ってきた何かがあるような気もする。菅沼で生活していく者として、息子・娘そして後輩たちによく伝えていくことが大切なことだと思う。

## 5. 東田代村跡地



- ・ 東田代村跡に行き、村の様子、石仏群を見ることができて、良かった。
- ・ 生活の一部としての森や川をどう作るのか。田代原の萱刈り場を残せるか？
- ・ 石仏、石塔の数と種類の多さに驚いた。主婦の目から見て、冬の水汲み、炊

事洗濯、食料の確保は難儀。居住地が窪地にあったが故、冬の強風から幾分守られただろうが、除雪も大変だったろう。

- ・ 旧東田代村の小高い丘は、石仏や墓地跡が散在しており、樹木の間伐や石仏の修復などを行うと共に案内板や道標を整備すれば、素晴らしい名所となり得る。近くの川との往来によりその魅力は倍増すると思う。
- ・ 田代の石仏も良いが、カヤ刈り場の景観が失われていくのが残念だ。サエラとのコントラストを大事にしつつ、保ちたい。
- ・ 江戸時代頃まで、何を食べていたか。何を着ていたか。どんな布を使っていたか。里の人と何を交換していたか。石仏の多さと暮らし。お釈迦様の微笑を感じさせるものもあった。
- ・ サエラスキー場ゴルフ場と田代村跡、このコントラストが重要ではないか？近代開発の象徴と400年のときを経て残っているもの。この対比が貴重である。どちらがより人の気持ちを引き付けることができるか、問題を感じさせることができるか、訴えかけるものは何かなど考えてみたい。
- ・ サエラスキー場は、昭和60年頃、十年の議論の上、開設された。当初、経済にも雇用にも貢献したが、考え方が幾分変わった。「開発したらもう農地には戻せない。」
- ・ 昔の人が観賞用として庭先に植えたと思われるサクラソウがきれいに咲いていた。ほかにも何種類かの花が咲いていたが、昔の庭先を想像させるこれらの花は保存しておきたい。
- ・ 住居跡と小立沢にはさまれた、小高い尾根を歩いていたときに見た大きな針桐<sup>はりぎり</sup>について、いろいろ考えて楽しんだ。他の木と比較して、2本の大きな針桐。どうしてこれだけが切り倒されずに残っていたのか。針桐について調べてみたい。

## 6. 小立沢

- ・ 「旧東田代村の脇を流れる小立沢の美しさは、ほかにあまりないほどだ。」と風の人の浦嶋さんが言っていた。言われてみると人工物が何もなく（少しごみがあったけど清掃すればよい）、コケも美しく、川幅も適当であり、遊び場としても絶好のところだろう。
- ・ 川で遊ぶことや山で遊ぶことが日常的であった。
- ・ 小立沢のせせらぎに心を洗われた。
- ・ 「この橋がなければ見ることはできなかった景色」と本会会長が言ったが、確かにその通りで、橋ができるまでは空中だった所。橋から下を見下ろすと足がすくみます。片品で一番高い橋かも。

## 7. 昔の食べ物

- ・ 麦、小麦、大豆が主だった。うどんはオメデタイときにも出た。
- ・ さとう大根、とうもろこしの茎、渋柿、カボチャ

## 8. 昔の遊び

- ・ 木の葉滑り、川で遊び、山で駆け回って遊んでいたのが日常的であった。
- ・ 山林は昔、遊び場であり、食材調達の間であったのだが、今現在では山林に入ることは少なく、荒れていくのはとても寂しい。昔は宝の山であった山林は今でもその価値や可能性があるのではないか？ それを探りたい。

## 9. 民俗

- ・ 盆棚が、竹ではなくホオの木を使うのが不思議だ。地域によって違うらしいが、実際はどうなのか、集落や地域ごとの違いについて調べてみたい。
- ・ 正月行事がなくなった、よって正月に各家庭をまわらなくなった。スキー場や民宿などで休みがなくなった。山に入ることがなくなった。山林の価値がなくなった。本当の豊かさとは何なのか考えたい。
- ・ 葬式のときに出る食事について、菅沼の料理は特に美味しいといわれる。けんちん汁は格別だそうだ。確かに、現在でも既製品で間に合わせことなく手作りで行っている。レシピを作って菅沼精進料理として、アピールしても良いのでは？

## 10. 現在の菅沼

- ・ <sup>うつの</sup>内野に片品村農協が作る「田舎体験施設」を周辺の田畑、山林など一体化させて景観形成できないだろうか。
- ・ 菅沼の西原の景観を新しい景観としてどう作っていくか？
- ・ 杜に行く道がよくなった。
- ・ 新宇毛内橋からの絶景に感動した。
- ・ 杉やヒノキや松など植林したところが多いと思っていたけど、身近なところにも雑木林があり、植生も豊かであると思う。
- ・ 菅沼の村の中には水源を始め興味深い所が多くあった。
- ・ 全体として山林が手入れされないまま放置されているのが気にかかる。
- ・ 道行く子供たちが自ら挨拶をしてくるのも新鮮だ。民度が高いのではないか。時々古い道を歩いてみて、昔の人たちと同じリズムや同じ呼吸をしながら考えてみる。その中から何かが浮き上がってくるのを待ってみる。そんな時間も必要だと感じた。強く感じたのは昔の人の「祈り」ということに対してのとても深く強い思いだった。草木に神が宿る一草一木に対してのとても

まじめなまなざしを少し垣間見た。

- ・ “炭焼き農業”等から“(農協等)共同出荷型農業”、そしてネット販売や店舗販売型農業へと移行して来ている。農業から農作業や野菜・果樹等の収穫体験型の観光農業へと、次世代の仕事の形を過去から現在を見て探していく必要がある。
- ・ 駒こまの休みは、ラベンダー畑の除草とその後のバーベキュー・パーティーというイメージだが、元来は馬を休ませるためのものであった。現在では馬を使うこともなく6月第一週は農家の人にとって忙しい時期である。現在の仕事のサイクルと合っていない気がする。
- ・ 生活の一部としての森や川をどう用いるのか、だ。
- ・ 化学肥料を使わない農業をするために広大な牧野を必要としていた。今では、化学肥料や農薬を使うことが日常的である。食品の安全性について問われる昨今、過去の農業に学ぶべきところがあるように思えた。

#### 11. 季節感

- ・ ふっこし。10~11月、尾瀬の方角から吹く風のこと、冬の訪れを感じさせるものだ。住民はそれでもって冬の到来を感じ取り、前に冬支度をした。風から季節を感じるなんて、ロマンティックな感じがする。

#### ク. 菅沼用語の整理

西原と総称しているが、それぞれの地区はこう呼ばれていた。

- ・ [日光にっこうの杜もり] 現在のちびっ子広場。小高い丘で桜の大木があり、芝のような草のある場所だが、昔も子供の遊び場だった。郷倉ごうくらという名前の倉庫みたいなものもあった。
- ・ [松原まつばら先さき、三本松さんぼんまつ、並木松なみきまつ] これらの地名の通り、明治頃まで多くの松並木があった。会津街道、日光街道沿いにかんりの松の並木があったけれど、明治の片品小学校建設の折にほとんど切り出されたとのことだ。
- ・ [狐きつね平へい] 林檎亭りんごていあたりの傾斜地をさす。昔から狐が多く出たそうで、昔話が残っている。
- ・ [うしろうら(後ろ裏?)] 西原の運動広場のあたり。
- ・ [みちなかご] 鎌田への近道、日陰坂おろっさかへ行く道の分岐点あたり。
- ・ [なかつぱら] 星野学さんの花園あたり。西原の中心辺りから来ている。
- ・ [くぼ] 尾瀬霊園あたり、一段くぼんだ地にある。
- ・ [はけた] 会津街道沿いの大崖沿い。

ケ. 菅沼探検隊マップ 1



菅沼探検隊マップ 2



## ・ 築地探検隊

### ア. 築地探検隊『あるもの探し』の実践

築地は、平成17年10月22日の1日のみで行なった。集合場所は、築地住民センター。築地の居住地内の探検グループとその裏山の景観探しグループの二班に分かれた。参加人数は総じて22人だった。

築地は、今まで、集落内の石仏等を本格的に調べたことがなかったし、よって把握しきれていないとされて来た。この機会に全戸に『あるもの探し』のチラシを配布し、参加を呼びかけた。昔の行事や歴史を把握し、残すことは、築地の宝になるとの思いで、この計画を進め、みんなが忙しい中だが、実施できて本当に良かったと思っている。

- ・ 日時 平成17年10月22日 1日間
- ・ 場所 築地地内と築地の十二の上、開墾地
- ・ 内容 築地地内班 自然神、石仏、昔の生活など調べる  
景観探し班 築地の景観の良いスポットを探す

### イ. スケジュール

|             |                                 |
|-------------|---------------------------------|
| 10:00       | LJ21 と打ち合わせ                     |
| 13:00       | 住民センター集合、参加者に説明、打ち合わせを行う        |
| 13:30～15:30 | 調査（築地を良く知っている年配者が参加）            |
| 15:40～17:00 | 年配の人に話を聞く（4人参加）                 |
|             |                                 |
|             | 一時解散                            |
|             |                                 |
| 19:00       | 年配の人から、引き続き話を聞く<br>調査表、写真の集計をする |



#### ウ. その結果

二班のうち、築地集落内の班は歩きで回り、景観の班はその周囲を車で回った。

まずは、集落内探検からの報告だ。

築地の居住地には、思っていた以上に石仏が多くあり驚いた。長く住んでいる自分でも知らない所があったのは、一緒に回った年配の人に教えてもらったためであった。中には、雑草が覆い茂っていて見えない状態の石仏もあった。

LJ21の浦嶋さんたちが風の人として参加していただいたが、暮らしている私たちがなとなしに見ている民家の木、へだまの木、山栗、かしわの木、かつらの木、湧水からの沢の流れ、高い田んぼからの景色、落花生や柿の軒ほし、昔盛んだった牛舎、豚舎、こんにゃくの貯蔵庫、夏涼しい茅葺きの家等、彼らにとってはどれもこれも興味深く見えたようだった。

風の人たちは、川との生活の関わり合い、旧道探りなどを通して、村の発展の状況を思い浮かべようとしていた。私たちも見方を変えたりすることで、先人の工夫や知恵を蘇らせられれば、それもまた宝ものになるかもしれないと感じた。

石仏関係では、霊符様、水神様、お不動様が林の中に埋もれていて長く見えていなかったが、今回年配者の案内で見つける事ができた。昔は、田んぼがあり、大きな木はあまり無かったので、誰もお参りに行けたようだ。この近くには田んぼのためのため池があり、夏は蛍が光っているのが見られる。

今回の成果のひとつは、石仏や景観のよい所のスポットを大きい地図に書きとめ、それらの写真と説明書を載せ、築地住民が見られるように住民センターに展示したことだ。

なお、探検隊当日の午後3時40分から、昔の生活や農業や行事を年配者から聞く機会をもうけたが、参加者は年配者の迫力ある話にびっくりしたようだ。

かつて、村が発展し、人口が増え、ひとつだった水車が、二つになり、三つになったという歩み、その水車のひとつでも復元できれば面白いと思っている。



## エ. 築地の昭和 30 年頃と今

今回、築地で『あるもの探し』をし、集まった皆で話した中で盛り上がったのは、子供のころよく遊んだこと、森（神社）や学校の行き帰りの遊び、食生活、うどん、焼餅、トウモロコシ、農業、“おこさま”（蚕）、景観や景色という話題が次々と出てきたからだった。たとえば、昭和 30 年頃、食は自給自足中心だったから、そういう農業があり、それに食生活や景観が結びついて来たように思う。

次に、東の山沿いなど周囲を探検した報告である。

築地、そして尾瀬三ヶ峰高原は、LJ21 の朝田さんが指摘されるように、宇条田峠からの景色からして、緑の畑が多く、農業が似合っている地域と言って確かだろう。

そこで昭和 30 年頃と現在の農業、食生活、景観を比較しながら調べてみようという事になった。年配の方々や他地域から嫁いできたお嫁さん、片品が好きで移り住んだ人たちを交えた話し合いの場を持ったらどうかということになったが、実現出来なかったことは今後宿題として置きたいものである。

お祭り、十日夜、<sup>とうかんや</sup>どんどん焼き、昔の遊び（ヒコーキタンク、陣取り）など伝統的行事については、この際、尾瀬三ヶ峰高原の会の部会活動に期待することにした。

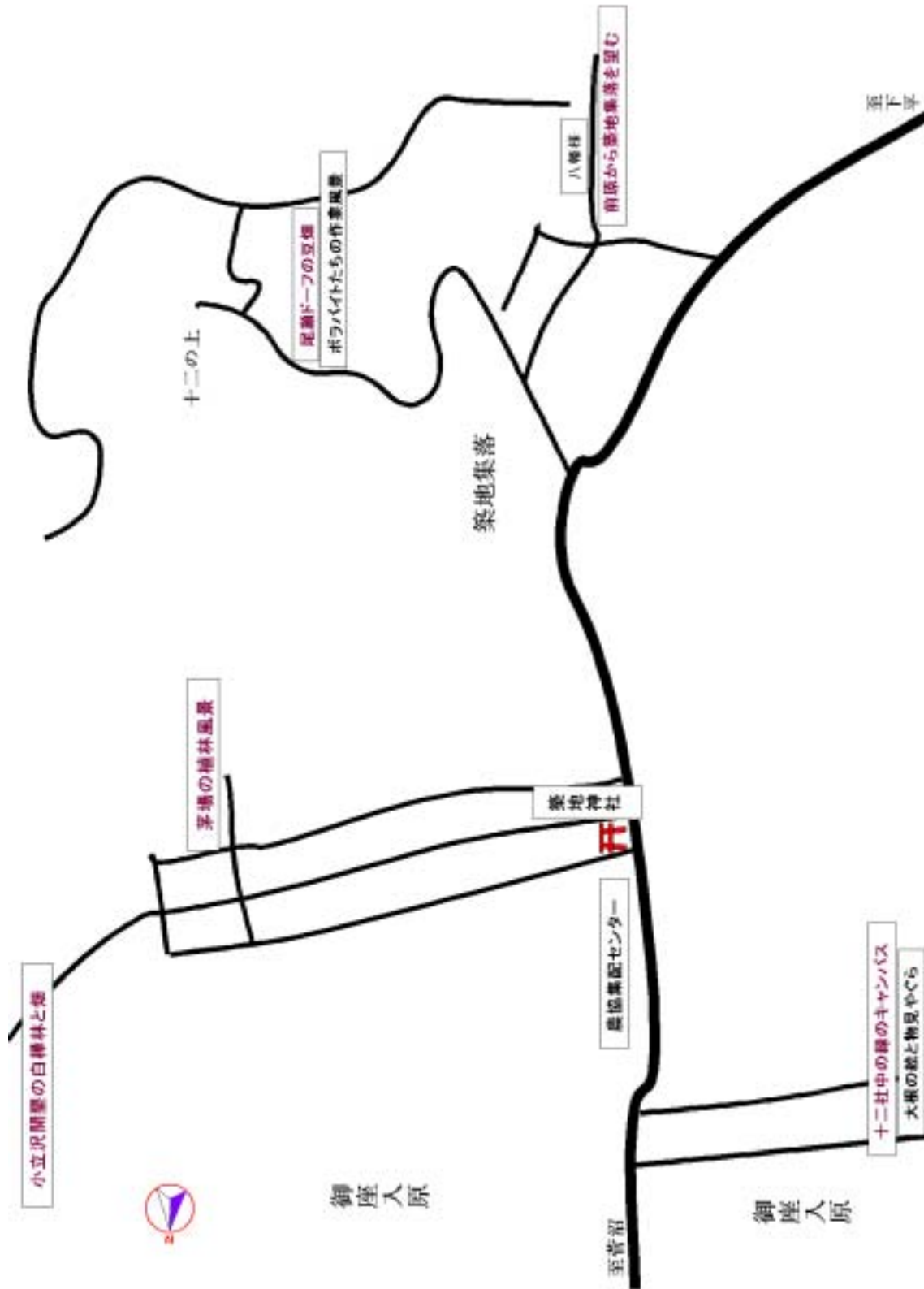
オ. <データ> 昭和 30 年ごろと平成 17 年の農業・食生活・景観比較

|     | 昭和 30 年ごろ                                                                                                                                                            | 平成 17 年                                                                                                    |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 農業  | 小麦<br>大豆<br>粟<br>おこさま(蚕)<br>コンニャク<br>茗荷<br>やまごぼう<br>役牛<br>林業、炭焼き<br>出稼ぎ                                                                                              | だいこん<br>レタス<br>きゅうり<br>アスパラ<br>ブルーベリー<br>あじさい<br>トルコキキョウ<br>水芭蕉<br>大豆<br>スキー場へアルバイト                        |
| 食生活 | うどん<br>焼餅<br>たらししゃき<br>つめっこ<br>魚<br>とうみぎ(こうしゅうとうもろこし)<br>たくわん                                                                                                        | ご飯<br>パン<br>うどん<br>肉や魚<br>サラダ<br>くだもの<br>浅漬け                                                               |
| 景観  | 茅山<br>桑の木、まわりが見渡せない畑<br>曲がった深い道<br>狭くぬかった道<br>みどりが多い<br>森の杉の大木<br>集会所前の銀杏の大木<br>かさの桑原家のケヤキの大木<br>積雪が多く、学校へ行くのが大変<br>静かで、ゆっくりした時間<br>待ち遠しいお祭りや正月<br>夏すずしい茅葺きの家<br>囲炉裏 | 風通しのいい高原<br>見晴らしの良い広い原や<br>大きな畑<br>道が舗装で便利<br>車、トラクターがにぎやか<br>広い神社<br>便利な農協集配センター<br>雄大な武尊山<br>きれいな、あったかい家 |

カ. 築地探検隊マップ 1



## 築地探検隊マップ 2



## 下平探検隊

### ア. 下平探検隊が「あるもの探し」を实践

下平地区では、平成 17 年 10 月 23 日に行なった。集合場所は、下平集会所で、参加の延べ人数は 15 人だった。

今回の講師は (LJ21 に依頼した探検隊であることからして) 他地区と同様だった。天候的には好転に恵まれたが、秋の農家の収穫期ということもあり、少し少ない参加人数となった。したがって、当日発見したことの確認や不明の点等については、後日の追加調査が重要なものとなった。

### イ. 下平探検隊のスケジュール

当日の日程その他は、以下の通り。

1. 日程 平成 17 年 10 月 23 日 (日) の 1 日間  
09:00 ~ 15:00
2. 場所 下平地区内 (立沢地区を除く)
3. 内容 古道 (古い道) や自然神・石仏などを調べる  
下平の暮らしを調べる  
の二つのテーマに参加者が分かれて、下平を調べる。
4. 調べ方  
郷土学という方法で調べる。
5. その他  
下平の住民にはできるだけ多人数参加して貰うと共に、他地区の人にも参加して貰い、外から見た集落の特徴・感想等も取り込み、下平地区の特徴を的確に把握するように努めた。
6. 持ち物  
下平探検隊事務担当が用意したものは、郷土学についての説明資料、調査方法についての説明資料、下平地区の住宅地図のコピー、2 万 5 千分の一の地図コピー、公図の写しコピー、下平の石仏・昔の村々の記述より下平部分 (『片品村の文化財 & 片品村文化財めぐり《誠道街道》』『片品村史』) などだった。  
各自が用意したものは、ノート・鉛筆、カメラ (持っている方)、お茶・ジュースなど。
7. スケジュール  
10 月 23 日 (日) 09:00、下平集会所に集合。  
自己紹介、スケジュールなどを説明。

参加者を2班に分けて実施することに決定  
1班 - 集落の中(家並み・神社等を調査する)  
2班 - 集落の外側・他集落とのつながり・  
土地利用など  
10:00、調査に出発。  
12:30、下平集会所に集合。(調べたことの  
記録、調査の整理、参加者間の  
交流)  
15:30、解散。

#### ウ. その結果

- 1班 - LJ21の浦嶋裕子さんを中心とした「浦嶋グループ」は、集落内の家・蔵・養蚕室・井戸・巨木・神社・石仏・生活と農業の仕事場として使っている各家々の庭などを見てまわった。地区の人たちにとっては、毎日見ている当たり前のところだが、外部の人の視線でもって改めて詳しく見つめ直してみた。
- 2班 - LJ21代表の朝田くに子さんを中心とした「朝田グループ」は、集落の外側の古道・石仏・神社・用水路・土地利用など、住宅のまわっている地区の周辺地域を調査し、他集落とのつながり、昔の暮らし(生活の生業・信仰)などを見てまわった。1班と同様に、地区の人たちにとっては、一見何の変哲もないところばかりだが、風の人の目線に促されながら、改めて自分たちの居住地域を見つめ直してみた。

#### エ. その反省点(=今後の課題)

下平探検隊は、天候に恵まれ藪の中や急傾斜地でも、スムーズに行動でき、時間に無駄なく調査ができた。反省点としては、以下の点がまとめの話し合いの中で指摘された。

- 日程が1日間だけで、時間が足りなかった。それでも思わぬ発見ができた。とはいえ、事前の準備や調査が不足していた。
- 各自にそのつどメモしてもらおうなど、工夫すべきだった。とくに聞き取り調査でのメモが十分に取れなかった。
- 下平探検隊の実施全体が、終始、LJ21に任せきりであって、自分たちの積極性や消化能力が不十分だった。
- 調査・探検に、隔年代層・老若男女・地区外の参加者等の多方面からの参加者をお願いできなかった。参加者が少なかったため、下平地区の今

後の取り組みとして展開していくときに、大きな課題を残した。

- まとめや編集の作業や報告書の作成に苦労した。普段から活字に慣れていないし、それらの作業や作成に必要な会議が何回も必要だったが、十分に開けなかった。

#### オ. 下平探検で発見したこと

下平で郷土学を実践して（再）発見したことは：

- ふだん見なれているものも、実はよく見ていなかったか、気づいていなかった。昔は生活の拠り所としていた風習や行事等も、今では形だけ残っていたりまたはすっかり忘れられ、目もくれられなくなった事などが、この探検で、あらためてその貴重さを感じた。
- 地区外の参加者（LJ21の人を含めて）意外な視点や意見から、改めて納得する・理解することが多かった。
- 自分たちの地域をあらためて知ることとなった。世代を超えて伝承していかなければならないことや地域づくりといわれている、地域の人達が地域（＝自分たち）のためにもっと積極的に取り組んでいかなければならないことの大切さと、その内容の多さを知りました。
- 地域の活性化の動きは、とかく心身ともに活発な年代が中心となるが、熟年者の経験による知恵も重要なことが再認識された。

#### カ. 下平の再確認と再発見

- 下平の歴史

下平集落は、『片品村史』によれば、

明治10年の『下平村誌』の中に、今の集落から東の方角の山の高いところにあった高寺というところの下の平らな場所ということ、

築地や菅沼の「うえ」や「かみ」の土地（集落）に対して、下平には「しも」の「平ら」という説がある。

下平の郷倉内の古文書は、郷倉取り壊し後、高橋安次方に全部移してあるそうだ。人口世帯数等で資料として残っている古いところでは、貞享年間（1683年から）の水帳による屋敷数が19戸、明和元年（1764年）には、戸数51戸で人口206人、嘉永2年（1849年）には戸数24戸で人口109人、明治10年（1877年）には戸数24戸で人口116人となっている。

下平の人々は、かつて近くに水源や用水がなかったため、水場に近い、今

の集落から下ったところを中心として居住していた。そのころは屋敷内から湧き出る泉を利用したり、ほかの泉まで汲みに行ったり、掘った井戸を利用したりしていた。また築地集落から来る流末水を利用していた。

- 用水路・耕地整理の実施

下平集落にとっては、豊富な水の確保が必要な課題だった。

耕地（主に畑作地）を水田に改良する**耕地整理**が行われた昭和20年代を機に、水田が多く作られるようになった。この耕地整理では、大立沢川から用水を引き込む工事も実施された。



このときの用水路は、関係者が共有名義として登記されている。

上水道に関しては、昭和30年代に大立沢川脇からとる水源が完成して、ようやく水の確保がなされた。



- 井戸跡・下屋敷

今は、飲み水としては使わなくなったが、家の周りの湧き水を大事にしている家がある。



自家用水道を作って利用していた水道が残っており、今でも現役のところがあった。また昔、共同井戸で使っていたものが保存されている。



元旦の朝に、川水を感謝の言葉を唱えながら汲み、神棚に供え、その水を使って蕎麦焼餅を作った。その水は、今では水道からだが、以前は井戸の水を汲み上げてやっていた。

- <sup>じゅうにさま</sup>十二様の所在地

明治初期の公図を見ると、かつての十二様の位置は宅地地域の隣接の小高い見通しの良いところというように読み取れるが、生活用水の確保・道路の整備等に伴って、宅地の中心が移動した関係で、今の十二様は集落の中になってしまっている。



十二様は、山一切の神様で、山仕事に従事する人たちから、厚い信仰を受けていた。隣接する築地やその隣の菅沼の住民が思うのと同様に、重要な神様としていたようだ。十二様の使いで、災難を教えてくれるといわれるオコジョに出会うと、その日は用心して山仕事を休むくらいに、十二様を信仰していた。

- <sup>まないたくら</sup>真菜板倉での農業

下平地区は、耕地整理による耕地の拡大及び整理統合とあわせて、より多くの土地を求めて大立沢川の南側、つまり利根村（現在の沼田市利根町）に新たな開墾地をもって作物栽培を行っている。これは、当初、新宅に出た者および地区外から転居してきた者が主だった。この地域は、利根町大字平川字真菜板倉という。

- 土蔵

今回の“村”めぐりで、下平以外の人から言われて気づいたことがある。土蔵の多さである。

下平は地区内の道路が細くて昔のまま。土蔵は、他の地区では取り壊したところがあるようだが、下平地区は全般に地下水位が低いので土台からの痛みが少ないようで、たくさん残っている。そこには特徴ある屋号が見られる。



#### ● 養蚕室

養蚕は、かつて産業として、その農家はもちろん国家財政まで支える力があつた。

下平地区は、昭和40年代、養蚕が盛んだつた。片品特有の幹の太い大きな桑の木に登って、枝を選定し、落ちた桑の葉を集めた。その蚕がまだ卵から孵ってほんの数センチぐらいのときに飼われた場所と思われる蚕室が今も残っている。これも今回の発見だつた。素晴らしいものなので、活用するなり、保存をしてほしいとの意見が出た。



#### ● 巨木と草花

下平には、片品村指定の天然記念物（巨木）としての、星野家のマメガキと星野家のイチイが今も健在だつた。

家々にはその庭先に草花や花木を植えていた。各家がそれなりに手入れをして、早春から初夏にかけては、次々にいろいろな花が咲く。やしおツツジ（赤・白）、山ツツジ、れんげツツジ、フジ、花菖蒲、熊谷草、敦盛

草、カリンの木、山桑の木、芝桜などだ。

- 下平の石仏群

下平集落の北端に道祖神・馬頭観世音・如意輪観世音・閻魔<sup>えんま</sup>様があり、集落の南の淵には供養塔・奪衣婆<sup>だつえは</sup>・馬頭観世音がある。これらがもともとそこにあったのか、またはなんらかの理由で一箇所に集められたのか、憶測を呼ぶが、それについては今後の調査に委ねたい。

- 下平の神社と祭り

神社内に祭られているのは、日光権現・諏訪明神・天照皇大神・春日大神・八幡宮である。私たちの住む下平では、8月の最終日曜日に行われる夏祭りで、神社の建物に入って社を回るときに、歌う(=唱える)言葉がある。それは、事務所(組長の下の役で地区内の責任者)が先頭になって鎌を持ち、二重に張ってある縄の前で、その綱を切って、2つある入口の左側から入り、社を3回まわる時に歌う(=唱える)のだ。



「よーのなーかのーよいときはー」《事務所》「よーのなーかのーよいときはー」《後に続く一同》「こーまにつーのがおーいそろー」《事務所》「こーまにつーのがおーいそろー」《後に続く一同》下平の祭りは、春祭り・夏祭り・秋祭りとあるが、このならわしはどういう理由か夏祭りだけである。またこの言い方は「よーのなーかのーよいときはー」《事務所》「こーまにつーのがおーいそろー」《後に続く一同》と昔は言っていたという人もある。

昔は8月31日に、しめ縄を刀で切ったこともあったようだが、今は大分変わった。そういえば、昔(昭和35年ごろ)の夏祭りには、摺淵集落の入口で商売をしていた茨城屋さんがやって来て、水鉄砲・お菓子類を売っていた。この言葉は「世の中の良い時は」「駒に角が生えそろう」で、駒は子馬のことだ。当時の農業の主役である馬が丈夫に育ち、かつ豊作であってほしいと神様に祈るものだった。また夏祭りは、社の西側にある諏訪様

の祭りなので、左から入って、日光様の祭りのときには、右側から入ることになっている。

キ. 探検隊参加者感想カード

- ・土室<sup>どむろ</sup>が2棟残っていた。土蔵造りで空気の抜け穴があり、中はいぶすような棚になっている。名人・永井紺周郎の養蚕法に適ったもので、残すべき貴重な建物だ。これを利用して燻製<sup>くんせい</sup>を作ってはどうか。
- ・かやぶき屋根の住宅があった。現在住んでいる人に聞くと、夏は涼しくて、みんなが集まってくるという。
- ・下平の端の方にあった、今は住んでいない藁葺きの屋根に、夏来たときユリがたくさん咲いていてきれいだった。
- ・下平では、山野草や木を愛でる人が多く、オープンガーデンをみんなでやってみたらどうか。
- ・かやぶき屋根の空き家を借りて、夏の夜に、劇や芝居をやってみたらどうか。
- ・面白かったのは、土蔵にある家紋と屋号。各家の屋号を門柱か表札にして家の前に設置したら、良い風情になると思う。

ク. 今回の“村”めぐりで出会ったすばらしい言葉

・産土様と産土道

産土様<sup>うぶすな</sup>とは、その地域を守護し、その地に生まれた人の守護神となって、一生を常に見守ってくれる神様のことだ。産土という言葉は、古くから使われてきた歴史的な表現なので、少し回り道だが、時代に沿って振り返ってみたい。

古代においては、氏<sup>うじ</sup>を名乗る氏族がまつた神を氏神<sup>うじがみ</sup>といい、その氏族の構成員を氏子<sup>うじこ</sup>と呼んだ。中世においては、武士が在地性を強め、氏族という血縁社会から地縁社会へと変化する中で、その土地の神である産土神<sup>うぶすなかみ</sup>を氏神としてまつようになった。

近世には氏神と氏子の関係に倣って産土神を奉じる産子<sup>うぶこ</sup>という呼び名が使われるようになった。現在では、神社の氏子区域に居住する者を氏子とし、その神社を産土神社<sup>うぶすなじんじや</sup>あるいは氏神様といっている。

氏子区域は旧村程度の地域区分のこともあるが、狭い範囲からずっと広い範囲まで多種多様である。同時に複数の階層（旧郷、旧村、旧字、近隣数家など）の産土神社の氏子であることもある。全国津々浦々には何れかの産土

神が坐し、人はその産土神社の氏子になっているようである。この区域の範囲は、古来からの伝統に基づくもので、明文でない事が往々にしてある。地元の伝承により区域が定められているからです（西磐井地方の産土様紹介のデータより）。

下平では、神社に行く道を昔は産土道<sup>うぶすなみち</sup>と呼んでいた。

#### ・シシグネ

昔は長いシシグネが、部落の外側に続いて築かれていた。北は土出から始まって、閑野 - 東小川 - 須賀川 - 田代 - 築地 - 下平 - 平原と続いて数里に亘っていた。クネは、昔は4～5尺ぐらいの高さがあったらしい。今はだんだんならされて、所々に2～3尺ぐらいの面影をとどめている。また昔は所々に木戸があり、それをマセ、またはシシマセといった。また番小屋もあって、そこに村人が交代でつめ、念仏鐘をガンガンたたいてシシを追い払ったものだ（『群馬県民族調査報告書』）。



最近、猪があまり見られないのは、昔大雪が降ったとき大量に死んだとか、ほかの地域に移動してそれから戻って来なくなったからだとか言われているが、定かではない。



## ．御座入探検隊

### ア．あるもの探し」を实践

御座入地区は、平成 17 年 11 月 26 日に「御座入探検隊あるもの探し」と題して、LJ21 の朝田くに子さんという専門家を招き、御座入地区内外から 17 名の参加者で、下記の日程で実施した。

### イ．スケジュール

1．日時 平成 17 年 11 月 26 日（土）  
午後 1 時 御座入集会所集合

2．場所 御座入地区内

3．内容 神社、社、<sup>ほこら</sup>祠などの探索

石仏、石塔などの探索

御座入集落の歴史、文化、暮らしぶりなどを調べる

4．スケジュール 13:00、御座入集会所に集合

LJ21 の朝田くにさんの紹介や日程説明

16:30、地区内の「探検あるもの探し」を終了

一旦解散後、午後 7 時に集会所に集合。

昼間のまとめや集落のお年寄り達の話聞く。

### ウ．探検隊手法で御座入の今昔を考えた

御座入探検隊あるもの探しのまとめとして、御座入の今昔を考えてみた。

御座入という地名

日本武尊が東征の時、この地から見える尾瀬三ヶ峰高原一帯に心を動かされ、御座入りされた。また旅立つ時何人かの部下をこの地に残されたと伝えられている。

神・仏・宗教

・神社

御座入鎮守の杜には、武尊明神、<sup>こすてんのう</sup>牛頭天王、諏訪明神の三神殿が一棟の建物内に祀られ、<sup>あきばいなり</sup>秋葉稻荷の社と<sup>やしろ</sup>天神様の石宮、<sup>てんじんさま</sup>十二山神の男女二体の石宮が祀られている。

昔は神社の境内であった処に花咲に通ずる道路を設けた為旧道のどこかに有った双体道祖神も、据えられている。

この神社内の武尊明神と諏訪明神の神殿の彫刻は、日光東照宮が完成してその職人が御座入へ立ち寄って造ったと云う人も居るが、武尊明神神殿内の奉納物に元和元年（西暦 1615 年）が記されている。日光東照宮の完成はそれよりおそく、1635 年だ。元和元年には、徳川家康はまだ健在だ。また、一棟の内に三神を同居させているところもめずらしい。秋葉稻荷は、この社より古くからの石宮が、摺淵の裏面に当たる、岩山に祀られている。

#### ・お寺・お堂

集落戸数の割に石塔、石仏の多さでは、他の集落に比べても負けず劣らずであろう。

御座入の上段地区に「本尊、聖観世音、第二十九番札所、永福寺」跡がある。林道宇条田線から、山手から約 50 メートル入ったところに<sup>だつえは</sup>尊依婆（ミソなめ婆さん）が座る。そこから石段を約 20 メートル登ると、石畳が張られ、お堂が建てられていた。石段下の尊依婆の側には、石の金精体の石塔らしきものが転在している。

この永福寺は、沼田横道三十三番観音霊場として、元和元年にひらかれた札所の一寺で、当時の古文書の御詠歌にも「ござ入り」が歌われているようだ。年に一度は他町村の信者が一組ほど参って見える。

札所には切っているが、このような小さな寺は、下段地区の南端にも建てられていた話も聞いた。その近くに、昔の位置から移転されたかも知れないが、ミソなめ婆さんの石仏や他の石仏も確かに据えられている。

この他の石仏は、道祖神、庚申の文字塔から、三猿を彫り込んだ庚申塔、不動明王の文字塔など、他地区に見られない石塔等々、他地区に見られない数と種類が見られる。また昔からの何軒かの墓に、和尚の墓石と云われる円柱の上も丸めた形のものが幾体も見られる。

これらを見ても寺やお堂が一寺だけでないことがうかがえる。



・菊紋付の宝篋印塔<sup>ほうきょういんとう</sup>

それでは、「石仏が何故これほど有る？」という時別の話がある。

その昔、京都の朝廷から何らかの命を受けた高僧が住みつき仏教、学問、農事等を教えたという。

この事を土台として考えると、寺・石仏の多さ、又、中国地区の「菊紋付の宝篋印塔」がこの高僧に関係があるとすればうなずける話である。

○ 御座入村の領地

現在、尾瀬三ヶ峰高原に大字御座入大字唐沢、字黒石等、他の地区には見られない飛地が有る。昔はこのような山林の飛地が戸倉にも有ったそう。

天下が豊臣秀吉の時代、沼田城主の真田家に御座入の人が仕えその人に真田家の娘を嫁にとらせその時、御座入に領地を与えられたことは片品村史にも見える。

又築地地区所蔵の古文書の中にも「築地村の領地の一部を御座入村に与え、年貢は御座入に持たすから心配なし」との内容が記されているという。

領地の話として、御座入村は天領（天皇の領地）として他村とは年貢の納め先が違っていたという話も有る。

この天領という話も筆者の独断で考えると、「神社の彫刻の立派さ」「宝篋印塔の菊紋」「天領」これらがみなつながっていくのである。

これらをつなぐには、それぞれの年代の記される古文書をさがす事がこれからの宿題となる。

○ 御座入の農林業

片品川沿いに現在見える水田は、昭和 20 年代初期までは河川敷で数戸の田があるだけだった処へ土地改良事業として払い下げられ現在の形が出来たもので、以前の耕地は、神社周辺と対岸の須賀川方面から見え北地のリンゴ園から下方へ扇形に見える斜面を主とした一帯が古くからの耕作地と考えられている。

この他宇条田峠の花咲側斜面と、尾瀬三ヶ峰高原の畑だ。

御座入の戸数の変化

昔の記録は不明だが、明治 39 年（1906 年）頃は、御座入の戸数は 40 戸弱だったようだ。

現在、平成 18 年（2006 年）54 戸で、1 戸当り平均 3 人程度となっている。明治から昭和 10 年代当時は、1 戸当たりの人数は多かったようだ。ちなみに昭和 10 年代（1930 年代）の年間出生者数は 10 人であったが、平成 10 年代（2000 年代）の年間出生者数は 0～1 人と減っている。

昔は、2世帯の大家族の家もあり、平均5人と考えると住民数はほぼ現在と同様であったと思われる。

#### エ．反省点と今後の課題

- ・ 御座入探検隊の実施日が11月26日で、秋もだいぶ深まり、冬がもうすぐそこまで来ているという時季だったので、野外を歩き回るには少し気が進まなかったが、幸い当日は天気も良くあまり寒くもなかった。次回は春か夏の暖かい時季にやれたらと思った。
- ・ 事前のチラシ配布やPR不足などで、参加人数が少なかった。もっと子供たちが参加できるような企画、日程など、再考が必要だと思った。
- ・ 野外での活動が半日しかなく、もっとのんびりと途中でお茶でも飲みながら一服したり、神社の境内で昼飯におにぎりでも食べたりと、丸一日は欲しかった。
- ・ 7時から集会所に集合して、お年寄りの話を聞き、村の歴史や、昔の事など知らない事を聞くことができて良かった。
- ・ 私たちが子供だった頃は、“村”の寄り事や冠婚葬祭、田植えなどの百姓行事のときに、近所のお年寄りが地域の今昔物語をよく話してくれたと聞く。今はそんな機会も少なくなり、昔のことがだんだん忘れられていく。何か形にして残しておかなければと思う。

オ．御座入探検隊マップ



## ． 須賀川探検隊

### ア．須賀川探検隊が「あるもの探し」を实践

3回目の地元学をLJ21の朝田くに子さんを講師に迎え、11月26日に御座入、翌27日に須賀川で行った。

須賀川地区の日程は、午前がフィールドワーク、午後が座学だったが参加者は、午前が9名、午後が4名と人数的に少し寂しいものがあった。常日ごろの会員から一般の人々への呼びかけや問題提起の無さを実感した。

特に長老の方々にこの機会に様々な由来を語ってもらう良いチャンスだったが、それを生かせなかったのは一番の反省点だ。

予習をしておこうと生まれて46年目にして初めて須賀川の隅々まで、しらみつぶしに歩いてみた。意外に知らないこと、気づいていなかったことの多さに驚いた。その「発見」が今回の郷土学が与えてくれた大きな宝のひとつかもしれない。

### イ．須賀川探検隊のスケジュール

1. 日時： 平成17年11月27日(日) 09:00～15:00
2. 場所： 須賀川地区内(唐沢を除く)
3. 内容： 古道や自然神石仏などを調べる
4. 呼びかけ方： ビラの各戸配布、有線放送
5. その他： 特に長老の話聞く為、個別訪問などを含め住民に多数参加してもらうように呼びかけた。他地区の人にも参加してもらい、外から見た集落の特徴、感想等も取り込み、須賀川地区の特徴を理解するように努めた。
6. 各自が用意した物： 筆記用具、デジタルカメラなど

### ウ．反省点

参加人数が少なかったのが一番の反省点だ。「伝承」が大切なテーマだから、そのためには老いも若きも、そして子供達もが同じ時間と空気を共有し合うべきだった。それが十分できなかった。

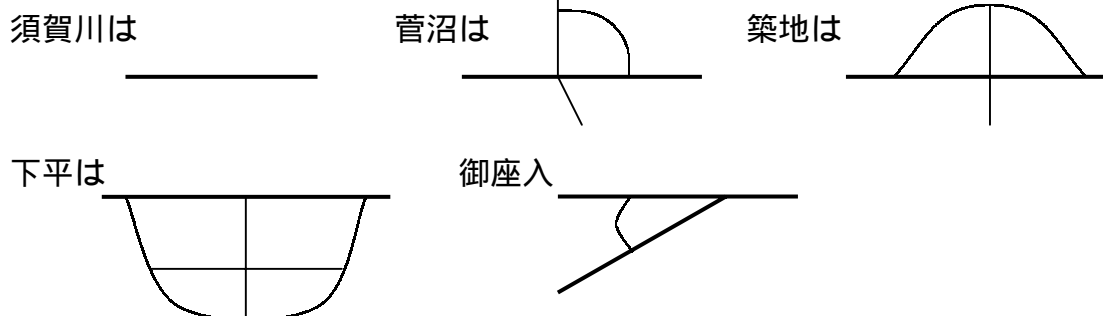
### エ．発見したこと

1区での郷土学実践は、今回が3回目。菅沼から始まり、築地、下平、御座入そして須賀川集落の順で、私としてはほとんどに参加することができ、ふだんは車でなにげなく通り過ぎる場所も、地元の案内人とゆっくりと歩いて回ると自分の家から半径2kmほどの地域でさえ十分知らなかったことに気づかされ、驚いたのだった。

須賀川だけでなく、各集落の年配者の昔話を聞きながら、のんびりと歩くことで、それぞれの地区の空気を肌で感じる事ができたのが良かった。

私が特に感じたのは、地形や地理が人間関係に与える影響だ。

単純に記号で表すと、こうなる。



(太字は幹線道)

路地はたくさんあればあるほど、そして細いほど、そこには物語や逸話や神話があるように感じた。路地は宝の山だ。ランドセルで道草を食う子供らや腰の曲がったおじいさんやおばあさんは路地にいるという神話でしかも人間くさい空間の役者たちなのだ。

須賀川には国道沿いに家屋がある。その利便性との引き換えに失ってしまったものがあるような気がする。そのことをほかの集落の細い道を縦横に歩いたことと比較して、考えさせられた。

今回は、呼びかけに対して参加者が少なかった。呼びかけが不十分だったのかもしれないが、もしかしてこれが須賀川の地域性なのだろうかとも考えさせられた。

#### カ．須賀川の伝統行事や祭り

(かつて行われたものが主で、今では廃れたものもある)

[大晦日] (12月31日)

餅は28~9日ごろまでに搗(つ)いておく。米、粟、きみの3色(粟、きみは2臼づつほど)で、合わせて10臼くらい。

しめなわ  
注連縄、松飾を作る。玄関、床の間、台所、風呂、トイレ、外の流し、庭の水神様に至るまで、玄関と床の間以外は小さく。除夜の鐘が鳴った後、村内の神様にお参りに行くためのお飾りも藁で作る。

ご先祖のお墓、赤羽様(三烈士)、天神様、薬師様、水神様、神社などだ。



朝からお正月のためのご馳走作り。午後の明るいうちに子供たちからお風呂に入る。風呂からあがると、新しい衣類が用意されていて、いつもより早めの夕食はいつもの居間ではなく座敷に用意される。大晦目だけは、子供でも杯にちよっぴり酒をいただく。一年間無事に過ごせたことに感謝する戸主の言葉で夕食が始まる。夕食時間もいつもより長く、除夜の鐘がなるまで花札、カルタ、トランプなどをして遊び除夜の鐘がラジオから聞こえてくると寒くないように身支度を整えてお参りにでかける。暗い中を各家々から三三五五、人が集まり会う度に新年の挨拶をしながら神社に向かう。お参りは神社から始まり、川下に下って行き、最後は水神様である。



#### [正月](1月1日)

身支度を整えてから、新年の挨拶をして、お年玉をもらい朝食をいただく。

朝食は雑煮である。前の晩からダシをとっておいた汁にはスルメ、人参、大根、昆布などが入り醤油味。薬味は、ネギ、青海苔、七味である。

朝食がすむと、小学生以上は誠道分校(誠道公民館)に集まり、年賀の挨拶と来賓の言葉を聞き、みかんを5~6個もらって帰る。書初めをして座敷にぶら下げた。他に前年に生まれたばかりの赤ちゃんがいると暮れのうちに親類から掛け軸が贈られていて何

本も座敷に飾る(女の子、男の子用に絵模様が違った)。  
お年玉を持って、お店に行きトランプ、くじ引き、ぬり絵、コマ、  
凧、羽子突きなどを買いこみ、これらで遊んだ。

[歌い初め](1月2日)

歌い初め。この日ばかりは生菓子をたくさん食べた。

[十二講](1月12日)

十二講のこの日は、須賀川集落の新年度役員を決める。

[小正月](1月14日)

小正月にはまゆだま繭玉飾りをする。“今年もまゆがいっぱい取れますように”との  
願いを込めて行う。

繭玉は、米の粉でつくる。小さめな丸い団子と一回り大きな繭玉の形をし  
た団子でできている。茹で上がった団子が冷めるのを待って、やまくわ山桑(あかば  
や)の枝には丸い団子を刺し玄関、トイレ、台所、居間、風呂、稲荷様など  
に供える。ケイツカ(堆肥)の中心に山桑の先端部を使い、飾ることもする。  
桑の枝には、繭型の団子を刺し、赤、黄、白、緑色の様々な形をした花菓  
子をぶら下げるが、冬の寒々とした座敷をほのぼのとした雰囲気にしてく  
れる。

家庭によっては、木をきれいに削った花飾りを玄関にぶら下げた。  
今ではドンド焼きをするが、私が子供の頃はしなかった。何時のころから  
か復活したようだ。ドンド焼きには厄落としに当たる人が、男は酒を一升、  
女はみかんを一箱届ける慣わしだ。

ドンド焼きのボッチは、老人会が秋のうちにススキを狩り集めて置き、秋  
の道路愛護のあとに、組長、班長が出て、杉や松の枝を切り集め、ボッチ  
を作り、燃えやすいようにシートを掛けておく。

ドンド焼きの当日には、各家庭から出された松飾りを集めて最後の仕上げ  
をする。14日の午後4時頃に火をつけ、スルメを焼いて食べ、大人は酒を  
飲み、子供には役員が用意した菓子の袋詰めとみかんが配られる。

厄落としにあたる人は、三本辻に行き、自分の身につけているものと、年  
齢相当の金額(たとえば、19歳なら19円)を落として、厄を祓う。お金は  
本人でなければ、拾っても良いらしい。

ドンド焼きの火勢いがなくなりかけると、三三五五、厄落とし宅に、無礼  
講で甘酒を飲みに行く。これ以上は並べきらないくらいの“おごっつお”

(ご馳走)が座敷のテーブルに並べられ、甘酒もいただく。(昼は仕事の男の人も、夜には加わり、酒類が振舞われる。2、3軒御呼ばれに歩くと、お腹が一杯になるが、お付き合いのある家には無理をしても行かなくてはならない。

[初午](2月20日)

蚕を飼っている農家だけの風習かも知れないが、米の粉で大きめの団子をつくり、供える。隣近所や親しい人に声を掛け、お茶を飲みながら団子に砂糖醤油または黄な粉をつけて食べた。これは冬の暇なときの農家主婦の楽しみだった。

[ひな祭り](3月3日)

ひな祭りの日には雛様飯を作る。これは、1区で須賀川だけの行事だと、郷土学をするようになって始めて知った。

(今は途絶えてしまったが)2月末になると日が伸びて来ているので、学校から帰ってもまだ明るい。“カチコ”を踏んで河原に行き、かまどを作った。

子供だけで、それぞれ年齢や男女により好き好きに班を作った。石を積み上げて松の枝で屋根をつくる班、かまどの班、かまどの周りの石積みをする班という具合だ。

猫やなぎを手折りし、家に持ち帰ると、この季節に生花は無いので母が喜び、仏壇にお供えをした。

釜、米、醤油、卵、茶碗、お箸、新聞紙を持って行き、薪には杉っ葉や川木を拾って使った。

米の炊き方、研ぎ方、そして卵や醤油の入れ加減は、年長者が行ない、後輩に教えた。

炊き上がったご飯を石の上に供えてから、両手を合わせて拝んだ。

辺りは、まだ雪も残り、風も冷たかったけれど、炊き上がったご飯に卵と醤油を混ぜただけのご飯だったが、美味しく、楽しい子供の頃の楽しい思い出だった。班によっては、茄でジャガ、おでんなども作った。

今回、それが途絶えてしまったのが本当に残念に思えた。

嫁後さんは、節句には菱餅を土産に里帰りをするのが楽しみだった。

初節句の子供がいる家では、親類から雛様をいただいたお礼に餅を搗き、お返しにした。

[春祭り](4月15日)

戦後になってから村営住宅入り口に移動した<sup>ほこら</sup>祠。赤羽様にある祠、須賀川下にあるお宮を一つにまとめたものだ。秋祭りも同じ。神社に行き、お参りをして赤飯をもらって来たが、今では、お不動様の行事と同様に、集会所で済ませている。

[お不動様](4月28日)

立沢と須賀川の間を流れる沢を少し上った所に、雑木林の間から流れ落ちる滝がある。水量は少ないがなかなかの眺めだ。この滝の流れ落ちる側にお不動様が祭られている。

春の道路愛護には、その滝への道も整備する。沢の両側は崩れやすいため、場所によっては春になると土砂で通れなくなるからだ。

前日(27日)の夜は、お不動籠りと言って、青年団がお不動様の小屋で一晩を明かす。当日(28日)は、村の主婦(年配格)により、お念仏が唱えられる。午後からはお不動様にお参りをした人に赤飯が渡される。赤飯の材料は、前もって赤飯当番のお宅に米、小豆などを持ち込み、農家で無い人はお金を納めたが、今では材料を商店から買い入れて炊いている。



昭和30年代は、出店が出て、四角い提灯もぶら下がっていた(昭和一桁生まれの人に聞きましたら、提灯に俳句と絵が書いてあった)。もっと以前は、不動沢の入り口に盆踊りのような舞台を作り、踊りや芝居をし、出店も並び、近在からの人出もあり、賑やかだったようだ。

今では、前日の晩に消防団員が不動沢の入り口でバーベキューをして、当日は代表者らがお参りに行く。また誠道公民館にて赤飯、お菓子をお参りに行った人に渡し、組長や役員のほかに念仏組が集い、唱え、親睦を深めている。

(五月節句)

初節句の子供がいる場合は、3月の節句と同様に餅をお返しに配った。嫁ごさんの里帰りも、3月と同じである。とても楽しみだったそうだ。

[夏祭り](8月30日)

夏祭りは、農家が忙しい時期なので、お参りのみで済みます。

[お盆](9月3~6日)

3日は新盆：新盆の場合は、道中に自宅への目印のとして笹竹に白樺の表皮をさして火をつけてお墓に家人が迎えに行き背負って帰宅、2年目からは自宅入り口に迎え火として藁を燃して目印とし、仏様を迎えた。

座敷に組み立て式の盆棚を作り、ナス、キュウリで牛馬を作り、果物、野菜とともに飾った。

4、5、6日の晩は、盆踊りで盛り上げる。

ぼた餅などのご馳走を作り、親類の仏様を拝みに行く。

今では、楽しみというよりも、花集めの要素が大きい。

[秋祭り](10月30日)

秋祭りは春祭りと同じ形で行う。

[十日夜](11月)

茗荷の茎を芯にして藁で十日夜<sup>とうかんや</sup>たたきを作る。夜になると子供だけの集団で各家庭を回り、「十日夜々、十日経ったら恵比寿講……」の文句を歌いながら、玄関前の土を叩き、褒美に“あんぴん”餅またはお菓子もらった。今ではほとんどの家庭がお金で済ませている。

もらうこともさることながら、子供だけで夜賑やかに練り歩くのが楽しかった。

カ．子供の遊び

<春> 芹、餅草摘み、田んぼでボール投げ、鬼ごっこ、めんこ、かちん玉。田んぼに水を引く頃になると、ドジョウすくい(しょうぎを持ち川に入り川上から足でドジョウを追い込む)をしたが、食べる事はしなかった。

<夏> 河原で水遊び、カジカすくい(二人で手ぬぐいの両端を持ち、魚をすくった)。

<秋> 杉っ葉拾い(学校の日直当番は、少し早く行ってストーブに火を点けた。この時、火付けが楽なように、燃えやすい小枝や杉葉を持参した)。乾草ポッチにもぐって鬼ごっこ、宝島、ゴムとび、縄跳び。木の葉すべり(集めた落葉樹の葉は、家畜のための冬の床用や餌にしたが、時には集めた木の葉を斜面の下に落とすと良く滑り落ちるので、子供はそれに乗って遊んだ。それは秋の最高の楽しみだった)。

<冬> 子供が多かったので、家の中で遊ぶ事は少なく橇乗り、雪上での迷路、鬼ごっこ、家中ではトランプ、お人形ごっこ、おはじき、なんご、竹なんご。

#### キ. 須賀川の石仏

隈なく歩いて感じたのは、須賀川には石仏が意外と多いということだった。赤羽様(星野家のお墓)。昔はお寺があったそう。今回、歩いて“立派なお姿のお坊様”の石仏を発見した(私たちが知らなかっただけ?)。

大竹家のお墓

お不動様

庚申塚

薬師様

神社

尼寺の跡



庚申塚は、木が育ちすぎ、石仏が倒れそうになっていた。土に埋もれてしまいそうな石仏、ツルバラで覆われて石仏が見えないなど、手入れが必要と感じた。

探検隊中、年配者の話を聞けなかったのが、本当に残念だった。行事については、個人訪問をして聞き、書き記したもの。

須賀川は、比較的“新しい村”だったので、各家庭の出身地やどのような仕事で来て、何時頃に住みついたかを調べても面白いのではないかな。

ク．須賀川探検隊マップ



## (7) 石仏や神社に関する学習会

平成18年1月22日、片品村を代表する古文書・文化財研究家の大久保勝実先生を本会1月定例会に迎えて、誠道公民館で、午後2時から4時半まで、石仏や神社等に関する郷土学学習会を行なった。

平成17年度の郷土学実践プログラムも早10ヶ月、いよいよ報告書（と地元配布用資料）のまとめの段階に入ったが、その詰め作業に必要なものが大久保先生との学習会だった。



大久保先生の説明で、要点は以下の内容でした。

明治維新の時（まで）は、沼田方面からの会津街道のルートは上郷（の尾瀬グリーン街道）だった。<sup>おおがけ</sup>大崖が交通の大動脈（現在の国道120号線）となる前の話である。

しかし、どこから（日光街道への分岐点である）菅沼の西原に至ったかは、定かではなく、検証が必要。よって、下平 築地 菅沼ルートが考えられるが、それも確かではない。峠のこちらでは片品川の川辺を北上してきたことは事実だろうが、川場村から花咲峠あるいは千貫峠を<sup>ささいのかみ</sup>通って花咲村 御座入村 須賀川村 菅沼村に入ってきたルートも“生きていた”可能性があり、必ずしも平川村や追貝宿から須賀川や菅沼方面にやって来るルートだけで論議されるべきものではない。



単体道祖神は、必ず村の出入口にある。仏教でなく神道の影響を受けてつくられたもので、<sup>ささいのかみ</sup>塞神（道をふさぐ神）、つまり八街比古神を祀ったものだ。<sup>やちまたひこのかみ</sup>双体道祖神は奥さんも一緒に居てしかるべきとの考えから“夫婦”道祖神として出来上がったものだ。

庚申塔は、仏教と神道の影響がごっちゃ混ぜになったもので、中国の暦からでてきたものである。道教の教えに基づいた厄除けの倫理行のこと。庚申の日は最短では60日ごとやって来る。昔は、日待講、庚申待などを行なった。

味噌なめばあさんは、<sup>ざつえば</sup>奪衣婆のこと。三途の川を目前に、向こう側の「あ  
の世」の入口にいる<sup>えんま</sup>閻魔様に（これから現世を旅立つ人の善悪いろんな事の）  
報告を真っ先に入れる人。暇のとき、子供の世話をしている。よって、（具合  
の悪いところを直してくれる）子育て婆さんの役目も担うようになった。

<sup>じゅうにさま</sup>十二山神は、主人である<sup>おおやますみのみこと</sup>大山 祇 命 とその妻の<sup>このはなさき や ひめのみこと</sup>木花咲耶姫 命 が祀られた  
山の神のことだ。片品には58箇所が存在する。

大久保先生の理解の領域にたどり着くのは到底できないが、先生のような  
歴史に対する飽くなき探求心と想像力の一部でも身につけたいものだ。

#### （ 8 ）郷土学がもたらしたもの

郷土学を実践するまでは、自分たちの居住地は自分たちが一番よく分かっ  
ているはずだった。ところが、実践してみて、意外に（どころか）、あまりに  
も身近なことを知らない自分自身に気づかされたのだった。そう思った探検隊  
員が少なくなかったのではないだろうか。その気づきがあって本当に良かった  
と思う。

ただ、自分たちの目線と関心事だけで到達した再（ないし新）発見ではなか  
ったことも表明しておかねばならないだろう。これは、**風の人**が並々ならぬ知  
的好奇心と行動力でもって（時にはあたり構わず）グイグイ引っ張ってくれた  
結果でもある。もし、**風の人**なしであったなら、探検行為を省略したり、知っ  
たかぶりをしたり、肝心なことを問い直さず避けたりしただろうからだ。如何  
に地域に対して興味津々の“よそ者意識”が必要であるか、を思い知らされた  
あるもの探しだった。今回、**風の人**の役割を担ってくれた朝田さんや浦島さん  
たちに感謝しているところである。なお、地域を全く知らない**風の人**には、短  
期間の滞在がもたらす幾つかの誤解やトンチンカンな解釈があることも事実で  
あり、その部分は愛嬌として受け止めている。

とはいえ、一般論だが、**風の人**が、ほかの場面でも貴重であって、たとえば  
わが片品村のさらなる発展と充実のために現に良き刺激と風通しをもたらして  
いると言い切って差し支えないのではなかろうか。

#### （ 9 ）まとめ担当者の感想と将来展望

菅沼探検隊：「そういうのを守って、石仏のところをきれいにし、あそ

こ（秋葉様から霊符様）に道を造るので、地域の人たちも。よその人たち訪れほしい。昔の道や村が分かってよかった。そうした貴重なものを、子孫に伝達、かつ残してゆきたいと思った」（星野十季男さん）。「郷土学という手法で、1年間自分たちの地域を見つめてきた私たちは、この良い地域の（さらなる目標）実現のために、行動を起こす必要があるのではないかと思った」（大竹光一さん）。

築地探検隊：「やっぱり1区の尾瀬三ヶ峰高原の魅力はこの広大な地であり、緑いっぱいの光景が最高なのだと思った」（星野幸太郎さん）。

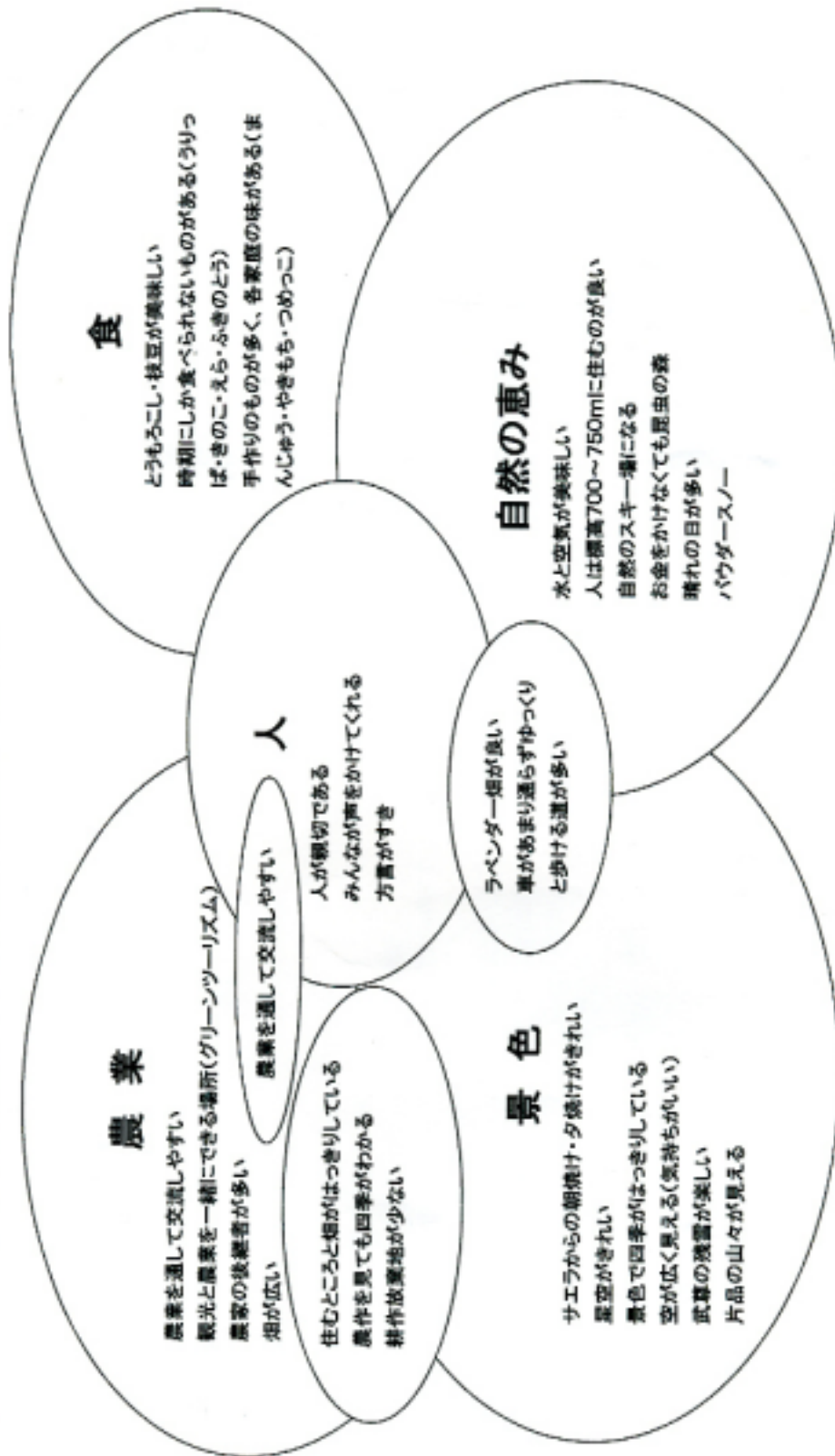
下平探検隊：「みんなでまわったことが楽しかった。それが集落での話題になったりすればますます良いと思うし、また盛り上げても行きたいと思う。参加した人たちが地域の人たちのことをいろいろと考え、それが地域の人たちと一緒に身近なことを考え、見直し、工夫してゆくキッカケとなったのでは...」（千明建太郎さん）。「郷土学をやってみて、皆が集まることによって、世代間のギャップがある程度埋められたと（いうメリットがあったと）思う」（千明佑吉さん）。

御座入探検隊：「昔の歴史を調べたいという気持ちになった。古文書が一杯あって、どこから手をつけていいのかわからないくらい。でも、次の世代のためにも真剣にやらなければいけないと思った」（星野聖治さん）。

須賀川探検隊：「1区は、全8行政区の中では、各集落が飛び地のように点在しているのが特徴だろう。そうした点もあってまとまりがない地区とばかり思っていた。全部の集落の探検隊に参加してみて、1区の多様性と一体感を感じたし、尾瀬三ヶ峰高原の会がそれらをさらに高めるための鍵になるのではと思った」（星野精一さん）。

~~~~~

テーマ「1区と尾瀬三ヶ峰高原のよいところ」



テーマ「1区と尾瀬三ヶ峰高原のここを変えたらよいくところ」



(11) 尾瀬三ヶ峰高原の会郷土学（平成17年度地域調査）についての感想

[この原稿は、ローカル・ジャンクション21 朝田くに子代表と浦嶋裕子氏から寄せられたものである。]

~~~~~

[実施日と実施場所]

第1回目 平成17年6月4-5日 菅沼

第2回目 10月22日 築地、第3回目 10月23日 下平

第4回目 11月26日 御座入、第5回目 11月27日 須賀川

片品村の郷土学調査に関わって4年目です。越本地区が1年目と2年目、花咲地区が3年目、そして4年目の今年は尾瀬三ヶ峰高原の会のある1区となりました。今までは、1年に1,2度、調査に入るだけでしたが、今回は同じ地区の集落を一つずつ調査しながらの3回ということで、少し丁寧に見ることができたと思います。

1区というエリアの一つひとつの集落が個性的であることに、あらためて地域は一口では語れないと思いました。それぞれの集落で私たちが特に気になったものを中心にまとめてみました。

### <菅沼>

<sup>もり</sup>社へ向かう日向道は、まるで石仏などの史跡のギャラリーのようです。毎年、大晦日の夜、寒い雪道を神社へ向かう村人の気持ちを少しだけ感じ取ることができるような気がする道でもあります。

その社のひっそりとした佇まいは、村人たちがしっかり守ってきたという証です。ハート型にくりぬかれた石灯籠に耳を寄せると、不思議な音がすると子どものころに心躍らせながら聞いてみたというみなさんのエピソードを語る表情が忘れられません。

観光地として有名な片品ですが、観光ではない、片品の素顔に初めて触れたような新鮮な場所でした。

いわくありげな開墾地、田代ですが、歴史的な捉え方よりも、ここでどのような営みが行われていたのかについて興味深いものがあります。菅沼の人たちとどんなモノのやりとりをしていたのか、どのように生活を維持していたのか。人の暮らしに必要なものとは何かを考える



うえで、こうした地域が集落の中に内在しているのは「研究」する材料としては面白いと思います。

### < 築 地 >

築地の集落は北に広がる平らな畑から、少し山に抱かれるようにわずかに窪んだ地形のなかに寄り添って暮らしている集落です。(築地の一番山手に行って眺めると、よく分かります。)築地の北にも南にも、平らな土地が広がっているのに、なぜ家はここに密集しているのかと言えば、ここに水が集まっているからです。小さな水の流れが幾筋か集落を通り、それに寄り添って家々が集まっています。窪んでいるとはいえ、河岸段丘の段上にあり、風をさえぎる山もない集落では、各家が強風から防ぐために、昔は高い杉などが植えられていたようです。



いまでは広大な畑が広がる築地の周辺ですが、昔と比べても、全体の耕地面積の増減はあまりないようですが、昔は一つ一つの畑がもっと小さいものだったそうです。動力が人力に限られていた時代、畑はクワを入れても疲れない大きさとなっていたのが、トラクターが導入されて、個々の畑の面積が一気に広がりました。地域の景色は人が使う道具によっても大きく変化するのです。

以上のように、この集落の風景は、片品村のほかのエリアとまったく違うものです。山間の中に広々とした畑が広がる雄大さは、人の暮らしと山が同時に見渡せる気持ちのよいものです。特に目についたのは、青々とした燕麥の畑でした。大根の連作障害を、燕麥を植えることで土壌消毒なしに解決しようというこの取り組みは、自然環境と人の営みの融合、先人の知恵と最新の研究成果の活用として意義深いものだと思います。



また、この地域には尾瀬ドーフの農場もあります。ちょうど大豆の収穫時期でいろいろな方が助っ人として参加していました。観光目的ではない地域外の人たちが、地域の人と「大豆収穫」という目的を共有し、収穫の喜びを共感できるという場はありそうでなかなかないと思います。この調査の前の週に友人知人たちとお手伝いに来ましたが、参加者は全員、大変充実した休日を過ごせたと喜んでくれました。



平地で日当たりがよく、水場がそばにある条件のよい場所は、その地域に定住が早ければ早いほど得ることができます。分家しながら開墾していく場合も、よい条件の場所はどんどん限られていきます。戦後、開墾されたという山中の農場にも足を運びました。車がようやく登れる急斜面を行くと急に視界が開け、武尊山が目の前に見えてきます。斜め前の山の斜面には上記の尾瀬ドーフの農場を見ることができます。条件は不利な土地ですが、標高の高さを実感できる農場で育つのは特産品の花豆。標高が高いからおいしい豆が採れる。が、昔の人は馬に資材を積んで自分の足で山道を通ったわけです。ここも観光地片品村が農産物の生産地であるという違った側面を語ってくれる農場の一つです。



### <下平>



古い家屋と、蔵や納屋などを含めた昔ながらの屋敷内の配置が残るしっとりした佇まいが印象的な下平。茅葺屋根の家や、養蚕が最盛期の時代の典型的な総二階の家など、地元の生業や暮らしを彷彿させるまちなみです。

ある一軒の家では、蚕の卵を温める室も残っていました。炭で温めていたそうです。今では、燻製室



として再利用できるかもしれません。また、印象的なのは、各家にある蔵に、それぞれの屋号が<sup>こてえ</sup>鰻絵として記してあります。

各家はそれぞれに、庭木や家の周りをきれいに飾っていて、歩くだけで気持ちよく、また昔の暮らしが垣間見れる博物館的面白さがあります。

片品川に向けてせりだした、河岸段丘の段上に位置する下平から、国道 120 号線に降りる山道は、登下校の道でした。この道を歩くと、片品の河岸段丘の段差を、体感できます。車道が整備され、省みられなくなった道ですが、周囲に花を植えるなど、道沿いに潤いをつくりつつ、こういう道を子どもたちとまた歩く機会がもっとあってもいいかもしれません。

### <御座入>

この地域は、不思議な場所です。田んぼがなく、築地の方に飛び地を持ち、農作業に通っていたといいますが、江戸時代のある時期、天領だったこと、ヤマトタ



ケルが御座を敷いて休んだところという名前の由来があったりもします。川が氾濫して橋を流してしまい、その補修にお金が必要なため、常に貧しかったという話も伝わっています。が、武尊神社の意匠は大変りっぱなものでした。何よりも心に残ったのは、ひなびた小さな祠に連歌が掲示されていたことです。



かつてはお年寄りが義太夫をうなっていたという話もあり、文化的な暮らしの豊かさの片鱗が見え隠れする面白さがありました。狭い地域であるのに、13種類の仏が全部設置されていることも興味深いです。手付かづの古文書がたくさんあるということで、歴史学の視点で見れば、面白い地域かもしれません。

### <須賀川>

土地が少なく、狭い谷を分けていて、日当たりが悪い、と条件はよくないのですが、現在は幹線道路際になり、家が立ち並んでいます。捉えにくい地域ですが、不動ノ滝への道を行くうちにいろいろなことが見えてきました。この崖の向こうは築地の広大な農地が広がっているのです。この落差が河岸段丘であることによろやく気がつきました。片品村の入り口でもあるこの地域のダイナミックな地形を4年目にして初めて知ったというわけです。



「地形」という新しい要素を見つけることができました。お不動様への入り口を左に急な坂をそれて登っていくと、菅沼の調査の際に行った社に行き着くことができます。この道は、地元の人しか通らない地域をつなぐ面白い道です。須賀川の人たちは、この急な坂を雪の中、登って行って一年の感謝と願いをかけたのでしょう。地域の心をつなぐ道といえます。

### <歩く>

ゆっくり歩くことは、車で通りすぎるだけでは見えてこない暮らしの側面を知ることができます。車を常に利用するようになると、住んでいても見えなくなることが多くなります。ゆっくり歩いて、石仏のそばに腰を下ろして、お茶の一杯も飲みながら、のんびりする。そんなひとときを過ごせそうな、住民も、訪問者も楽しめるような道にいくつか出会えました。燕麦の中に簡易のイスとテーブルを置いて、お天気のいい日に特別カフェを開店してみたいです。山で、川で、畑で、木陰で、神社で、石仏の傍らで、ピクニック気分をいろいろなシチュエーションで楽しむことができそうです。

### <風景>

雄大な自然の中に溶け込んで見える地域の暮らし方は、やはり昔ながらの丁寧な生活ぶりです。きれいに並べられた大根葉(ですか?)は風景を創ろうとして干したものでなくても、片品らしい、いい眺めになります。

6月の調査のときにはたくさんの花が庭先に咲き乱れていました。ルピナスが登り藤と呼ばれていることは初めて知りました。

植えられている花は園芸種が多く、1区らしい花はどれだろうと思いながら歩いていたら、田代で出会いました。名前はわかりませんが、狭いエリアに群生していました。かつて田代に住んだ人々、行き交った人々も目に



して、険しい山道でふと和んだ

かもしれません。築地の山の中で出会った野性のなでしこも可憐でした。



### <食べる>

おいしいものがたくさんあるのに、なぜか簡単に出会えない片品です。泊まれば食事がでてきますが、ランチやお茶となると、どこに入ればいいのかわかりにくいと思います。先日、尾瀬三ヶ峰高原の会の主催による食の文化祭が開催されたようですが、みなさんが家庭で食べておられる料理こそ、片品らしいものです。



これは大竹家でいただいたマイタケごはん。本当におしかったです。

トウモロコシ、リンゴ、トマト、大根、レタス、みょうが、花豆、白小豆(虎屋?)、大豆、マイタケ...片品だからこそおいしく栽培できるもののなんと多いことか。食の文化祭で商品化されていない食の力をうまく引き出して、おいしいメニュー開発を期待します。そして、片品美味ルートマップがぜひ欲しいです。

印象的なエピソードとして次のような話がありました。

- ・麻をつくっていたので、実を炒って食べ(どんな味がするのでしょうか) えごまと共に食用油を搾った。

麻の油は古くなると幻覚が出た(これはとても気になる話です)

麻はローブや衣服にもした（こうした技術は残っているのでしょうか）

- ・小麦と粟、小麦と大豆を組み合わせで栽培した。

そば、春そば、春撒いて8月に収穫 その後、大麦、小麦、雪の中で耐える。土を撒くと雪が早く融ける。

（四季のめぐりをうまく活用した農業は今も生きているのでしょうか）

- ・きびご飯：魚の卵ごはん。甘みがあるからうれしかった。

ひえ：黒ぎみは味がよかった。

（雑穀の栽培は片品では現在、どのように行われているのでしょうか）

- ・あけび狩り：種まで食べて便秘になったことも。バラの実で出した。

（あけびとバラの取り合わせはとてもきれいなのですが...）

- ・牛に餌をやるためにかっぱし（草刈場）によく行った。

- ・ヤマトタケルの伝説ゆえに、さといもとゴマをつくってはいけない。

御座入りではヤツガシラもサトイモも日照時間が短いからか、できないそうです。

（栽培に不適なものを伝説として言い伝えてきた知恵なののでしょうか）

- ・桑の木：霜にやられるから高くした。土地の境に植えた。桑にスズメが巣をつくった。

戦前から昭和34,5年ごろまで2年に一度、萱を取るために野焼きをした。山頂に雪がある4月20日ごろに大規模な野焼きをやった。養蚕にはトタンの屋根は温度差があり、萱の屋根が温度を一定にするのに役立った。みょうが畑に萱を敷いて光が当たらないようにする。光が当たると青くなってしまう。ピンクが高く売れる。萱によって雑草が生えない。

（かつての片品村に思いを馳せるときにわずかに残った桑の木がいろいろなことを物語ってくれます）

- ・若山牧水が大正10年に詠んだ景観

（とはどんな景観だったのか）

- ・水源が近すぎるから水が冷たくて、うまい米が採れない。冷害が3年に1回ぐらいあった。関東ローム層 軽石 黒土

（おいしいものがたくさん栽培できる反面、米には不適地。生まれた土地は選べないけれど、栽培するものは選べます。風土を形づくる太陽、風、水、土の中で土だけが人の手を加えられるもの）

## < 変 遷 >

お年寄りに話を聞くと、片品の歩みが自ずと見えてきます。政治や経済に翻弄されながら、生き抜いてきた足跡には、これからの未来への手がかりがたくさんあります。短い言葉の切れ端に当時の風景がよぎることがあり、風景は人

の暮らしとともに常に大きく、小さく変化していることがわかります。特に印象に残ったのは次のようなお話でした。

- ・昭和 23 年に精米所ができた。それまでは水車。機械は熱をもつからよくないと言われた。
- ・30 キログラムぐらいは背負ったものだ。
- ・菅沼には鉄砲うちがいなかった。なぜだろう。
- ・終戦後は大豆と蚕が主流だった。
- ・こんにゃくは寒さのせいかわかなくて4年かかってしまうのでやめた。
- ・養蚕のときは小麦を作っていた。麦の間に豆をまいた。
- ・みょうがは普通の作物が育たないところに植える。
- ・山ごぼう 大根 業者が入ってきて増えた 片品全体へ
- ・小麦は雪の下で腐ってしまう。反収が上がらなかった。
- ・開拓地だから昭和村のまねをしてきた。だからいつも 4,5 年遅れ。今では昭和村は大根がまったくだめになって、こんにゃくをやっている。土壤消毒がすごい。
- ・耕運機を買ったのが昭和 36 年。試験で 180 人受験して 80 人しか受からなかった。
- ・ほうれん草は昭和 40 年ごろから市場に出すようになったが、大規模にはできない。夏のほうれん草は寒いところでつくった。
- ・馬が財産の半分。人間以上の待遇だった。
- ・リンゴは昭和 20 年ごろが一番早く植えた人。昭和 29 年～47 年まで一反歩あれば、家族一人を養えた。
- ・かつてはホップを栽培したこともある。
- ・戦前は大豆と小豆がよかった。米と同じ値段がついたので、ブツブツ交換だった。

### <人>

今回は、昔の話だけでなく、現在の片品の話をいろいろ聞いたことがとても興味深く、私自身の新しい片品発見になりました。特にすでに広く知られるところになった尾瀬ドーフの千明市旺さんの大白大豆復活を中心に据えた地域再生と交流の取り組みに加え、燕麦による大根栽培の土壤再生への取り組み、漬物加工および販売の「加作」の食材の輸入ものから国産への切り替えの取り組み、早い時期から農家レストランを開業、民宿も行っている「みのりの里」、難しいとされるマイタケの自然栽培法の確立（これに関しては取材できていません）など、時代をリードする取り組みの数々が行われていることに新鮮な驚き

をもちました。

片品の人々は謙虚なのか、あまり自慢をしてくれません。あれは何ですか、どうしてこんなことをやっているのですか？と何度も問いかけてようやく出てきます。ここが面白いところでもあります。観光地として人を呼び込むためのイベント開催だけでなく、地域がめざす未来が見えるような取り組みにもう少しスポットをあてる必要があります。

これからの観光地にとって食の安全安心、それに欠かせない自然環境の保全はもっとも基本となることです。その基本をしっかり守るための活動や取り組みを、行っている人とともに広く報せていくことが地域のイメージアップに大きく寄与すると考えます。

### < 今回の調査について >

テーマが当初「石仏と古道」に設定されていきました。石仏や古道に関して詳しく調べていくことは古文書など残された文献を読み解くことも必要となり、歴史学の世界に踏み入りやすい状況が生まれます。郷土学は、聞き取りを中心に行う民俗学をベースに、現在と過去をつなぎ、地域の文脈を読み解き、未来づくりに役立てようというものです。

職業や住む地域が違えば、顔見知りでも何を考え、どんな課題を抱えて、どのように取り組んでいるのかは近い関係ゆえに話し合われることが多くないと思われま。リンゴやトウモロコシ、大根といった農業、レストランや民宿に関わる方が多い片品村には、視点を変えれば農業やおもてなしのプロです。互いの情報を交換すれば、いろいろ見えてくるものも多いかと思われま。こうした地域調査をきっかけに地域内で話し合う、理解しあう土壌が育つことも大きな目的でしょう。

また、農山村と大きく括られてきた山村ですが、「そこには稲作ではなく、山の幸を中心にした食文化を基本にした山の暮らしが構築されていた。その暮らしは、平地の人間が考える以上に豊かなものであったのではないか」と『知られざる日本』（白水智著）にあるように、御座入や須賀川のように稲作や畑作にはあえて不利な条件の地域でも、連綿と続く暮らしの足跡が色濃く残っています。「定住」という視点で捉えた山村の実像は現代の私たちにはまだまだ解明できていないことが多いと思われま。そこには自然の循環に即した持続可能な暮らしのあり方の知恵や術が詰まっていることでしょう。そして、楽しいこともたくさんあるはず。人は苦役だけでは持続するものではありません。遊びだけでなく、人と自然、人と人の関わりにもある山村の暮らしならではの楽しみをどんどん紐解いて、片品らしい、尾瀬三ヶ峰高原の会らしい活動につなげて行ってください。

## (12) 会員名簿

| 尾瀬三ヶ峰高原の会 会員名簿 |       | 平成18年3月中旬現在 |           |      |       |
|----------------|-------|-------------|-----------|------|-------|
| 会長             | 戸丸廣安  | 顧問(発起人代表)   | 星野 司      |      |       |
| 副会長            | 星野幸太郎 | 顧問(区長)      | 桑原健一郎     |      |       |
| 副会長            | 星野精一  | 顧問(区長代理)    | 堀沢功一      |      |       |
| 事務局長           | 星野十季男 | 団体会員        | 片品農業協同組合  |      |       |
| 会計             | 千明建太郎 | 団体会員        | サエラリゾート尾瀬 |      |       |
| 書記             | 星野 学  | 菅沼          |           | 星野幹也 |       |
| 須賀川            | 地区委員  | 古屋裕昭        | 菅沼        |      | 大竹一美  |
| 須賀川            |       | 草地ゆりゑ       | 菅沼        |      | 戸丸とし子 |
| 須賀川            |       | 千明富夫        | 築地        | 地区委員 | 小林君雄  |
| 御座入            | 地区委員  | 星野聖治        | 築地        |      | 星野 正  |
| 御座入            |       | 井上正志        | 築地        |      | 小林倉義  |
| 御座入            |       | 星野伸司        | 築地        |      | 金子長十郎 |
| 菅沼             | 地区委員  | 大竹光一        | 築地        |      | 千明市旺  |
| 菅沼             |       | 大竹文夫        | 下平        | 地区委員 | 千明佑吉  |
| 菅沼             |       | 大竹敏彦        | 下平        |      | 星野吉弥  |
| 菅沼             |       | 星野 祥        | 下平        |      | 高橋秀行  |

## [編集後記]

報告書をまとめてみれば、60頁を超えていた。当初、ポスター二枚分くらいの情報量と思っていたのは、大きな勘違いだった。それだけ、内容豊富な1区と尾瀬三ヶ峰高原と言っているのだから。

残念なのは、全戸配布の報告書が表紙など一部を除いては、白黒となってしまったことだ。カラー写真が見つらく、残念だし、申し訳ないが、予算がそこまで追いつかなかったもので、了承して頂くしかない。

これを機に、地域のことをより深く知って、必要あれば、旅人にも、地域の紹介や案内を買って出ることができる会(員)となりたいものである。

探検隊に参加して下さった方々、生き字引的存在また歴史の証人として深い世界を教えてくれた方々、そしてこの郷土学実践を可能にしてくれた(財)日本財団や片品村に対して感謝とお礼を言いたい。

編集作業には、菅沼から戸丸廣安・星野十季男・大竹光一・星野学(探検隊順で、敬称略、以下も)、築地からは星野幸太郎・小林君雄・桑原健一郎、下平からは千明建太郎・千明佑吉、御座入からは星野聖治・星野靖夫・桑原藤太郎、須賀川からは星野精一・古屋裕昭・草地ゆりゑが参加した。(HT)

本書：『尾瀬三ヶ峰高原の会 郷土学実践報告書』

発行日：2006（平成18）年4月10日

発行者：〒378-0403 群馬県利根郡片品村菅沼72番地

尾瀬三ヶ峰高原の会 Te.0278-58-2326

HP：<http://blog.livedoor.jp/ozemitugamine/>

印刷所：笠原印刷（有）

Copyright (c) 2006尾瀬三ヶ峰高原の会



「この郷土学プロジェクトは、競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。そして、この報告書を作成するに至りました。」